ソノ前ニ先ッ注意シナケレハナラヌ事ハ、戸數割ヲ賦課シテ居ナイ市カ相當ニ多ク、然カモソレカ大体大都市ニ多イ。昭和十一年ニ於ケル全國市數一二九市ノ中戸數割ナキ市數ハ三六市テアルカ、ソノ三六市中ニハ比較的大都市カ富裕地方所在市カ多イ。卽チ六大都市ニハ勿論戸數割カナク、地方的ニハ京濱、中京、京阪神、中國、北九州等ノ富裕地方所在市ニナイ。

次ニ平均課率ノ全國的差異ハ相當甚シク、十一年度當初豫算ニ依レハ最高ノ石卷市ハ三十三円五十錢テアルカ最低ハ首里市ノ五円七錢一厘テアル。イマ全市ノ中課率ノ最高ト最低ノ市ヲ列記スレハ次表ノ如クテア

戸數割課率高低比較（一戸平均十一年度當初豫算）

最高	圓	最低	圓
石巻市	三三五〇〇	首里市	五〇七一
新潟市	二八一一〇	仙台市	七三六五
浦和市	二二六四九	岡谷市	八〇〇〇
沼津市	二一八〇〇	濱松市	八二二四
秋田市	二〇三〇〇	那覇市	八六三八
釧路市	一九五〇〇	高知市	八八七四
萩市	一九〇〇〇	甲府市	九五二八
尾道市	一八九四八	奈良市	九九八六
郡山市	一八七三〇	新宮市	一〇二〇〇
福島市	一八二〇〇	市川市	一〇二三五

（註）「地方財政概要」ニ依ル

右表ニ依レハ最高課率ハ殆ント貧弱地方所在市テアルカ、最低課率ハ必ラスシモ富裕地方所在市トハ限ラス貧弱地方ノ市モ亦含マレテヰル。然シナカラ富裕地方所在市ハ最初ニ見タ如ク殆ント全部戸數割ノ賦課ヲ受ケテヰナイ。

ソコテ戸數割ニ於テモ亦大体富裕市ハ負擔カ輕ク、貧弱市ハ負擔カ重イト言フ事カ出來ル。

又地方別ニ之レヲ見レハ東北・北陸・九州地方ノ諸市カ高ク、中部、中國、山陰地方ノ諸市カ比較的ニ低イ。然シ後者ハ戸數割カ賦課サレテヰル地方トシテハ輕課サレテヰルト言フタケテアツテ、事実上地方的ニ最モ負擔ノ輕イノハ戸數割ナキ富裕地方テアルコトハ言フ迄モナイ。

次ニ町村ノ戸數割課率ヲ見ル。

昭和十一年度ノ課率ハ十六円七十錢七厘テアルカ、コノ課率カ長シテ他ノ租稅ト比較シテトノ位ヒ高率テアルカハ戸數割ノ性質上比較カ困難テアル。然シ免稅點カ他ノ租稅ニ較ヘテ極メテ低イ戸數割ニ於テ、納稅者一人當リ約十七円ノ負擔ハ驚クヘキ負擔ト言ハネハナラヌ。然カモ戸

數割ハ市ニ於ケルヨリモ遙カニ町村ノ方ガ高イ。從ツテ町村ハ戸數割ノ誤謬ナキ富裕市ヨリモ甚シクコノ點テ重課サレテヰルコト、ナル。

イマ標準的農村タトサレテヰル中部地方ノ某村ノ戸數割負擔ガ、如何ニ農村ヲ掩取シテヰルカ、又農村負擔中如何ニ大ナル部分ヲナシテヰルカヲ述ヘヤウ（數字ハ內閣調査局「地方財政ニ關スル中間報告」一一八一頁ニ依ル）

某村ノ租稅總額ハ四〇、六五六円テアルガ、ソノ割合ハ國稅七、五三七円、縣稅一〇、二四三円、村稅二二、八七六円テアルカラ村稅ガ最モ多イワケダ。ソノ村稅ノ中最モ多イノガ戸數割ノ一六、五〇〇円ニシテ實ニ村稅ノ七二%ヲ占メテヰル。

然シテ某村ノ總戸數ハ七三二戸テアルカラ一戸當租稅總負擔ハ五七円弱テアル。之レニ對シ戸數割ノ納稅一戸當平均ハ二四円四〇錢テアルカラ、一戸當負擔額ノ四割以上ガ戸數割テアル。

更ラニ村稅ノミノ一戸當平均ハ三一円二五錢テアルガ、之ノ中ノ戸數割負擔二四円四〇錢ハ實ニ七八%ニ當ル。

コヽニ引用シタ某村ハ内務省カ標準的農村トシテ選出シタ村テアルカソコニ於ケル戸數割負擔カ如何ニ大テアルカヲ以上ニ於テ見タノテアル。以テ一般農村ニ於ケル戸數割過重負擔ノ狀態ヲ推シテ知ル事カ出來ル。既ニ述ヘタ如ク戸數割ノ負擔關係ハ極メテ逆進性ヲ帶ヒテ居ルカラ、ソノ不公平ヲ除クカ爲ニハ出來ル丈ケソノ課率ノ低イト言フ事カ望マシイワケタ。然ルニ事實ハ最近高率化ノ一途ヲ辿ツテヰル。

昭和	戸數割平均課率	圓
二年	一九二三五	
三年	一九七三五	
四年	二〇二八七	
五年	一七六一五	
六年	一三二〇二	
七年	一三五〇六	
八年	一三九四五	
九年	一四八九七	

	昭和十年	十一年
	一五、四八八	一六、七〇七

圓

コヽニ注意スヘキ事ハ、世界恐慌ノ影響ヲ蒙ツタ昭和五、六年度ニ於イテ課率カ低下シタノハ當然タトシテモ、滿洲事變後ノ增加率カ極メテ多イトイフ點テアル。六年ニ較レハ十一年ニハ實ニ一三、二〇二圓カラ一六、七〇七圓ヘト三、五〇五圓ノ激增ニシテ、此ノ間正ニ二六%ノ增加テアル。

市稅ニ就イテ昭和六年ト十一年トノ間ニ於ケル增加率ヲ見ルニ、地租附加稅（七年）ノ四七%ヲ除ケハ、營業收益稅附加稅ハ一〇%、所得稅附加稅ハ殆ント增率セス、特別地租ハ却ツテ一三%ノ減率、家屋稅附加稅・營業稅附加稅モ殆ント增率セス、雜種稅モ亦同樣テアル。之レニ較ヘレハ町村戶數割カ如何ニ最近益々過重負擔ヲ激化シツヽアルカヲ知ル事カ出來ル。

或ヒハ又、町村稅課率ノ增加率ハ最近何レモ甚シイノテアルカ、之レト較ヘテ見テモ亦最近ニ於ケル戶數割ノ負擔過重ハ之等ニ劣ラナイ。

即チ同期間ノ町村税課率ノ増加率ヲ見ルニ、地租附加税（七年）ハ却ツテ減少シ、特別地税附加税ハ一七%、家屋税附加税ハ一二%、営業收益税附加税ハ二〇%、雑種税附加税ハ一六%等何レモ戸數割ノ増加率ニハ及ハナイ。タヽ、雑種税附加税ノミハ四〇%ノ増加テアルカラソノ上ニアルニ過キナイ。

カクノ如ク見テ來ルト、満洲事変後ノ戸數割ノ増課フリハ市、町村税ノ何レヨリモ最モ甚シイトイフコトニナリ、如何ニソレカ過重負擔ノ度ヲ高メツヽアルカヲ知ル事カ出來ル。

コノ戸數割課率ノ全國的負擔狀態ヲ見ルト、最高ト最低トノ差額カ極メテ甚シイ。コレハ地方税ノ一特徴テハアルカ昭和十一年度當初豫算ニ依レハ最高九〇、九一〇圓（神奈川縣）ニ對シ最低ハ一、六五〇圓（大阪府）ニシテソノ間八九、二六〇圓ノ大差カアル。

次ニ課率ハトノ地方ノ町村カ高イカ低イカヲ、例ニ依ツテ最高ト最低トヲ比較シツヽ見ヤウ。

戸數割課率高低比較（納稅者一戸當、十一年度當初豫算）

最高			最低		
		圓			圓
京都府	二三九一		沖繩縣	一〇九二	
石川縣	二二二八		高知縣	一一六二	
德島縣	二一三七		栃木縣	一四一一	
鳥取縣	二〇四五〇		千葉縣	一七九七八	
秋田縣	二〇二〇九		山梨縣	一二四二九	
奈良縣	一九九〇三		三重縣	一三三四七	
福岡縣	一九六七二		茨城縣	一三六〇六	
滋賀縣	一九五四九		埼玉縣	一三一一三	
山形縣	一九五二五		群馬縣	一三八八六	
長崎縣	一九五一二		大阪府	一三九八六	
全國平均	一六七〇七		全國平均	一六七〇七	

右表ニ依レハ、他ノ租稅負擔ニ於ケルト同樣ニ町村戶數割ニ於テモ亦地方稅負擔ノ法則カ作用シテヰル事カ知ラレル。卽チ地方稅ハ富裕地方程輕課サレルノテアルカ、町村稅ニ於テノミハ富裕府縣所在町村ト雖モ直課サレ、貧弱縣所在町村カ輕課サレル場合カアル。京都府、福岡縣、長崎縣等ノ町村ハ課率高ク、沖繩縣、高知縣等ノ如キ代表的貧弱縣所在町村カ著シク輕率ナノハ石ノ法則ヲ實證スルモノテアル。

然シテ地方別ニソノ負擔ヲ見ルト東北、中部、北陸、山陰、中南部九州等ノ貧弱地方ト京濱、近畿（特ニ京神地方）北九州等ノ富裕地方所在町村トカ重課サレ、關東、中京、中國等ノ比較的富裕地方ノ町村カ輕課サレテヰル。

昭和五年

	全國平均	秋田縣	山形縣	福島縣	岡山縣	京都府	鹿兒島縣	福岡縣	石川縣	東京府
負擔高	一六五〇五	一一六八	一一八五	一一九八	一二六〇	一二九五	一三〇四	一三四六	一三五八	一三六二
負擔額	一六五〇五	一一六八	一一八五	一一九八	一二六〇	一二九五	一三〇四	一三四六	一三五八	一三六二

	全國平均	大阪府	靜岡縣	福井縣	滋賀縣	千葉縣	山梨縣	三重縣	茨城縣	徳島縣	新潟縣	高知縣	鳥取縣	神奈川縣
負擔高	一六五〇五	一一六八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八
負擔額	一六五〇五	一一六八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八	一一八八

昭和五年府縣別高割負擔（自述各一戶當、十一種稅合併額）

第七章　家屋課稅ニツイテ

第一節　租稅体系上ニ於ケル家屋稅ノ地位

家屋稅ハ國稅ノ收益稅体系ヲ補完スルタメニ創設セラレタモノテアルカ、國稅ノ補完稅タル家屋稅ヲ地方稅トシテヂイタノテハ、他ノ土地、營業、所得等ニ對スル課稅トノ間ニ負擔ノ不公平ヲ生スルハ當然テアル例ヘハ土地ハ國稅ニ依ツテ最モ重課サレテヰル上ニ、更ラニ道府縣、市町村ニ於テ夫々莫大ナ附加稅ヲ賦課サレテヰル。然ルニ家屋ニハ國稅カ、ラナイ。タトエ地方稅テモ、地方稅タル限リ地方稅的不公平サヲ免レル事ハ出來ナイ。トコロカ家屋稅ハ道府縣ニ於テモ土地課稅ヨリモ遙カニ少ク、市ニ於テハ土地ヨリモ多イカ家屋ノ性質ヲ考ヘレハ市家屋稅カ多イノハ當然テアリ、町村ニ於テハ土地ヨリモ遙カニ輕課サレテヰル。

カクノ如ク、家屋稅ハ地方稅ナルカ故ニ他ノ稅種トノ間ニ負擔關係ノ均衡カトレテ居ナイ。從ツテ家屋稅カ收益稅タル事ハ今ハ間違ヒナイノテアルカラ、地租、營業收益稅カ國稅タル限リ、之レト關聯シテ家屋稅

モ亦國稅トスヘキテアル。尤モ物稅ハ成ル可ク地方稅トスヘキテアルカ今日遽カニ物稅ノ地方委讓ハ行ハレサウニモ見エナイカラ、若シ地租ト營業收益稅トヲ國稅トシテオクナラハ、負擔ノ均衡ヲ得ル爲メニ家屋稅モ亦國稅トスヘキテアル。

以上述ヘタ所ニ依レハ家屋稅カ甚シク他ノ物稅ト比較シテ輕課サレテヰルヤウニ見エルカ、事實ハ決シテサウテハナイ。タヽ、租稅体系上他ノ物稅ト比較シテ負擔關係カ構成的ニ不均衡ナ狀態ニアルト言フノテアル

第二節　家屋稅負擔ノ現狀ト町村家屋課稅ノ不合理性

家屋稅負擔ノ現狀ヲ見レハ、町村ノ課稅ハ餘リニモ不合理ナ點カ多イニ反シ、市ニ於テハソノ負擔カ輕過キル。更ラニ市ノ課率カ全國的ニ餘リニモ高低ノ差カ甚シイ。以下之等ノ諸點ニツイテ述ヘヤウ。

市ノ家屋稅附加稅額ハ最近十年間增加ノ一途ヲ辿リ、昭和元年度ノ一千二百万円カラ十一年度ニハ実ニ五千万円ニ激增シテヰル。コレテ見ルト如何ニモ市ノ家屋カ重課サレテヰル樣ニ思ハレルカ、成程市稅收入一億六千万円（十年度）ノ中、家屋稅附加稅ハ約五千万円ニシテ市稅ニ於

ケル第一位ニ位シテヰルカ、ソノ中ノ約七〇%ハ六大都市ノ分デアルデラ、一般ノ市税トシテハソノ富力関係カラ見テ決シテ多額ステルトイフ事ハナイ。現ニ最近ノ課率ノ増加率ハ町村ノ方カ遙カニ多イ。即チ昭和六年度ト十一年度トノ間ニ於ケル課率ノ増加率ヲ比較シテ見ルト、市ハ一・六五円カラ一・七一七ヘ〇・〇六一四増加シソノ割合ハ三・七%ニ過キナイカ、町村ニ於テハ同年間ニ〇・四七七円カラ〇・五三四円ヘト〇・〇五七円増加シ、ソノ割合ハ実ニ一二%ノ激増デアル。曩村ノ家屋ノ増税率カ都市ノソレヨリモ多イトイフノハ、餘リニモ不合理ナ現象デハナイカ。

課率ノ絶對額ヲ比較シテミテモ、昭和十一年度當初豫算ニ依レハ市ノ一・七一七円ニ對シ町村ハ〇・五三四円テアルカラ、市ハ町村ノ三倍強ニ過キナイ。賃貸家屋多ク、職業ト住宅トカ比較的ニ分離シテヰル都會地ノ家屋カ、実力以上ノ家宅ニ住ミ、職業ト住宅トカ殆ント不可分ノ関係ニアル農村ノ家屋ノ三倍程度ノ課率テハ餘リニ軽課スキル。

然シ戸數割ヲ賦課シ難キ市ニ於テハソノ課率カ極メテ高イ事ハ衆知ノ

事実テアルカ・イマソレ等ノ市ノ課率ヲ見レハ次表ノ如クテアル。

家屋税課率調（昭和十一年度當初豫算）

道府縣	課率（賃貸價格一円當）	戸數割ヲ賦課シ難キ市		同上市ニ於ケル道府縣税市税合計課率（賃貸價格一円當）	
		課率（本税一円當リ）			
北海道	三五・六 厘	室蘭	二、七五〇 円	一三・三五〇	錢
青森	四一・五				
岩手	二七・〇				
宮城	二五・〇				
秋田	四〇・〇				
山形	二三・〇				
福島	三一・五				
茨城	二四・〇				
栃木	四九・四				

| | | |

靜岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良
二八・七	市部一一・二 郡部二三・七	二六・五	四〇・四	二八・六	一〇・九	郡部二五・〇	四〇・〇
	名古屋 豐橋 岡崎 一宮 瀨戶		大津	京都	大阪 堺 岸和田	姬路 尼崎 明石 西宮	
五〇七五 四三六五 五三〇〇 五三九一 五八五〇		一三四〇	一三四〇	七九〇〇 一六〇〇 一〇七〇〇	四一八〇 六七七〇 六〇四二 四三一六		
一六・八〇四 一二・七一四 一四・九三〇 一五・一四六 一六・二三四		九・四五三	六・六九二	九・七〇一 一三・七四四 一二・七五五	一一・一一一 一三・七九二 一五・六四九 一六・二五〇		

和歌山	四三・四	和歌山	海南	一、三三	一、七三八	一〇〇一〇	一〇・七一八・八
鳥取	四八・〇						
島根	五〇・五						
岡山	三三・〇	岡山	倉敷	一、三三	一、四九三二八	一四・二二五六	一八・八一七・五
廣島	三六・六	廣島		二、〇二四		一一・〇六九	
山口	二四・四	下關		五六六	一、二五〇	五・八二一	一六・六五〇
德島	七四・〇	德島					
香川	六二・六						
愛媛	五三・八						
高知	七六・三						
福岡	一八・七	門司	若松	八幡	戸畑	三七五〇	三三八四〇	三三七三〇	四〇五〇	一七・八一七・〇	一九・八七・五

佐賀	三四・〇	
長崎	四四・四	長崎 二三八〇
熊本	六三・〇	一五・〇〇七
大分	六七・〇	
宮崎	六一・五	
鹿児島 内地 五七・〇 大島一八三・〇		
沖縄	九七・五	
平均	四二・七	

（註）「地方財政概要」ヨリ計算

右表ニ依レハ市附加税ノ全國平均課率ハ一・七一七円（他ニ都市計畫特別税〇・二二一円）テアルカ、戸數割ヲ賦課シ難キ市ノ殆ント全部カコノ平均課率ヨリモ遙カニ高率ニシテ、堺市ノ如キハ一一・六〇〇円ノ高率テアル。從ッテ之等ノ市ニ於テハ家屋税カ極メテ重課サレテヰル事

ハ事実テアルカ、然シ町村ノ戸數割ト比較スレハ殆ント問題ニナラナイ程ノ輕率テアル。

尚ホ家屋稅ノ道府縣課率ヲ見ルト、全國的差異カ甚シイ事ハ他ノ地方稅ト同樣ニシテ、昭和十一年度當初豫算ニ依レハ最低（東京府）ハ六・五匿テアルカ最高（鹿兒島縣大島）ハ實ニ一八三匿テアルカラ前者ノ三十倍ニ上ツテヰル。

然シテ道府縣間ノ負擔ヲ比較スルト、コ、ニモ亦地方稅負擔ノ原則カ作用シテヰル。右表ニ明ラカナル如ク六大都市所在府縣ハ極メテ輕率テアルカ、貧弱縣カ比較的高率負擔ヲシテ居ル。殊ニ九州地方ノ貧弱縣カ高率ナノカ著シイ。

之レヲ地方的ニ見レハ東北地方ノ一部、北陸、中部、山陰、四國、九州等ノ貧弱地方ノ課率ハ高ク、關東、近畿、中國等ノ富裕地方ハ輕率テアル。

市附加稅ニ高低ノ差ノ甚シイノハ、既ニ述ヘタ如ク戸數割ノ賦課ナキ市ノ課率カ高イカラテアルカ、最高（堺市）ノ一一。六〇〇円ト最低（

岡谷市）ノ〇・二八円テハソノ差カ餘リニモ甚シ過キル。家屋稅ノ附加稅トシテハ、戶數割ト聯關セシムルコトナシニ、ソレ自ラノ課率ヲ定ムルヤウニスヘキテアル。

然シテ戶數割ヲ賦課シナイ諸市ノ附加稅課率ノ間ニ於テモソノ程度カ區々テアルハカリテナク、ソレ以外ノ諸市間ノ課率モ亦種々雜多テアル。イマ前者ニツイテ見ルニ、比較的大都市ノ課率カ低ク、小都市ノソレカ高率テアル。又後者ノ場合ヲ見テモ同樣ノ事カ言ヘル。

地方的ニハ東北、北陸、沖繩等ノ貧弱地方カ高率テアル。町村ノ課率モ亦全國的ニ高低ノ差カ甚シイ。昭和十一年ニハ最高（北海道）ノ三・六五円カラ最低（愛媛縣）ノ〇・〇八円トイフ風ニ、餘リニモ課率カ雜多過キル。

然シテ府縣別ニ町村課率ノ高低ヲ見ルニ次ノ如クテアル。

全国平均	福岡県	新潟県	鹿児島県	京都府	高知県	大阪府	秋田県	長崎県	宮崎県	東京都	最高
全廃県平均	徳島県	愛知県	島根県	栃木県	大分県	協玉県	野長県	崎県	宮県	知県	最低

全国平均	福岡県	新潟県	鹿児島県	京都府	高知県	大阪府	秋田県	長崎県	宮崎県	東京都	最高
全廃県平均	徳島県	愛知県	島根県	栃木県	大分県	協玉県	野長県	崎県	宮県	知県	最低

家屋被害率高低比較（永禄一円當所利十一年度當初豫算）

右表ニ依レハ、貧弱縣所在町村必ラスシモ輕率テハ居ナイシ、富裕縣所在町村必ラスシモ重課サレテハ居ナイ。コヽニ於テモ亦地方稅負擔ノ原則カ作用シテヰルノテアルカ、コレハ町村稅ニ於テハ貧弱縣所在ノモノハ輕課サレテ居ルトイフワケテハナク、ソノ關シテヰル府縣カ富裕テアルト否トヲ問ハス、町村稅ハ全國的ニ高率テアル事ヲ物語ツテヰル事ハ既ニ述ヘタ所テアル。

然シテ地方的ニハ東北、關東ノ一部、京阪、九州地方カ高率テ、中部北陸、四國、九州南部等カ輕課サレテ居ル。富裕地方モ相當ニ高率テアル事ハ町村稅ノ一特徵テアル事モ亦他ノ稅種ノ場合ニ於ケルト同樣現象テアル。

以上ニ於テハ家屋稅カ市ヨリモ町村ニ於テ重課サレテヰル點ニ就テ述ヘタノテアルカ、抑々今日ノ町村家屋稅ソノモノカ不合理ナノテアルカラ、ソノ上他ヨリモ重課サレテ居ルノテハ、愈々モツテ町村課稅ハ凡テ惡稅ナリトイフ事ニナル。以下少シク町村ノ家屋課稅ノ不合理ナル所以ヲ明ラカニシヤウ。

今日何人ト雖モ家屋税カ収益税タル事ヲ疑フ者ハ居ナイノテアルカ、然ラハ家屋ハ必ラス収益的財産テアルカト言ヘハ必ラスシモサウテハナイ。勿論家屋カ一ツノ財産テアル事ハ明ラカタカ、ソレカ課税對象トシテノ財産テアルカトウカハ頗ル疑ハシイ。殊ニ都會地ニ於ケル家屋ニハ貸家カ多イカラコレカ収益的財産トシテ收益課税ノ對象トナルノハ當然テアル。又自己所有ノ家屋ニ住シテヰルトテモ、都會地テハ比較的ソノ人ノ能力ニ適ツタ家ニ居住シテヰルトハ見テ差支ヘナイカラ、ソノ消極的收益性ヲ捕捉シテ之レニ課税スル事モ出來ル。然ルニ町村就中農村ニ於テハ貸家カ殆ントナイ。從ツテ積極的ニソノ收益性ヲ捕捉シテ課税スルトイフヤウナ事ハ殆ントナイ。又農村テハ多ク自己所有家屋ニ居住シテヰルカ、居住者ノ消極的收益性ニ着目シテ之レニ課税スル事ハ、都會地ニ於ケル自己所有家屋居住者ニ對スルト同程度ニハ行カナイ。言フ迄モナク農村ノ人々ハ先祖傳來ノ家屋ニ住ンテヰルノカ多イカラ、タヽ家屋ノ大イサト現在ノ居住者ノ実力トカ一致シナイ場合カアル。都會地ニ於イテハ大体資力アル者程大キナ家屋ニ住ムカ、農村テハ寧ロ逆ノ場合スラ有

リ得ル。

更ラニ都會地テハ職業ヲ行フ場所ト住宅トカ分離シテヰル場合カ多イニ反シ、農村テハ農業ノ性質上ソノ經營場所ト住宅トカ一致シテヰル場合カ多イ。從ツテ自ラ大キナ家屋ヲ必要トスル。決シテ実力アルカ故ニ大家屋ニ住ンテヰルワケテハナイ。

カクノ如ク都會地ノ家屋ト農村ノ家屋トテハ、ソノ經濟的意義カ著シク異ルニモ拘ラス、等シク賃貸價格ヲ標準トシテ家屋稅ヲ賦課スル事ハソノ間ニ大キナ矛盾カ存スル。殊ニ一村農ツテ賃貸ノ事実モ無キニ、ソノ居住家屋ニ對スル課稅ヲ收益稅ト稱スルコト自体矛盾シタ現象ト言フヘキテアル。

殊ニ家屋稅ハ收益稅トシテハ最モ不公平ナ取扱ヒヲ受ケテヰル租稅テアル。則チ國稅收益稅相互ノ間ニハ出來ルタケ重複課稅ヲ排除スル目的ノタメ、例ヘハ營業收益稅ニ於テ其ト地租、資本利子稅トノ重複課稅ノ起ラヌヤウニ仕組マレテヰルノテアル。然ルニ家屋ニツイテモ營業ニ關シテハ土地ヤ資本ト同樣ニ考慮サルヘキテアリ、營業收益稅ニテ地租ヤ

資本利子稅ヲ擧ケル、如ク家屋稅ニ於テモ亦擧ケサルヘキテアニモ拘ラス、之レカ行ハレテヰナイ。ソレハ家屋稅カ地方稅タカラテアルカ同シク收益稅テアリナカラ他ノ收益稅ト不公平ナ取扱ヒヲ受ケルタ、家屋稅ハ不公平ナ課稅タト言ハナケレハナラヌ。然カモコノ家屋稅カ村ニトツテ最モ苛刻ナノテアル。

然シナカラ、カト言ツテ農村ノ家屋課稅ヲ廢止スヘキタトイフワケモ行クマイ。何ントナレハ都會地ニ在ルト農村ニ在ルトヲ問ハス、自己所有家屋ニ居住スル者ハ消極的利益ヲ享受シテヰルカラテアル。殊ニ貸家ニノミ課稅シテ自己カ所有スル家屋ニ住ンテヰル場合ニハ課稅シナイトナルト、家屋間ノ負擔ノ不均衡カ生スル。或ハ又都會地ノ家屋ニハ課稅シテ農村ノ家屋ニハ賦課シナイトイフノテハ矢張リ家屋間ノ負擔カ不公平ニナル。從ツテ農村ノ家屋課稅ヲ撤ニ廢止スルワケニモ行クマイ。

然シ農村ノ家屋モ亦消極的利益ヲ享受シテヰルカラトイフ、收益稅トシテノ消極的側面カラノミ見テ、ソノ家屋ニ課稅スルトイフノモ亦決シテ本道タトハ言ヘナイ。家屋稅ニハ明ラカニ純收益稅タル性質ヲ帶ヒタ

部分ト、消極的收益ヲ目的トスル補足稅的部分トカ併存シテキルノテアルカラ家屋課稅ノ賦課ハ主トシテ家屋ノ積極的收益性ニ著目スヘキテアル。

從ツテ家屋ノ積極的收益性ニ著目シテ都會地ノ貸家屋ニ主トシテ課稅スヘキテアリ、農村ノ家屋ノ消極的收益性ニ對シテハ出來ル丈ケ輕課スヘキテアル。然ルニ現實ハ既ニ述ヘタ如ク市ニ於ケルヨリモ町村ノ課率カ相對的ニ高率ナルノミナラス、最近課率ノ增徵率ハ遙カニ町村ノ方カ多イ。更ラニ又都會地ホト輕課サレテキルノテアルカラ、カヽル矛盾ハ速刻ニ改メナケレハナラヌ。

地方財政窮乏ノ原因

第一章　都鄙經濟力ノ不均衡

第一節　人ノ都市集中

國家財政ニ於ケル歳入ハ年々増加シツヽアリ、殊ニ近年ノ増加狀態ハ眞ニ前古未曾有ノ激増フリヲ示シテヰル。然ルニナカラ歳入ノ増加ハ經費膨脹ノ原則ニ基クモノニシテ、決シテ國庫ニ餘裕カ生シタワケテハナイ。寧ロ逆ニ國家ハコノ歳入ノ増加ニモ拘ラス異常ナル經費ノ支出増加ニ應シ難キ狀態ニアル。從ッテ國家ハ當然自己ノ負擔ニ於テ爲スヘキ事業ヲモ之レヲ地方ニ委任シテヰル狀態ニアル。更ラニ又國家財政ニ於ケル軍事費ノ激増カ地方ノ委任事務費ヲ増加セシメ、ソレ丈ケ地方財政ヲ壓迫シテヰル。

カクシテ國家財政ノ膨脹ト共ニ地方財政モ亦膨脹シツヽアル事ハ極メテ當然ナ現象テアル。コノ地方財政ノ膨脹ノ結果、地方稅ノ負擔カ増加スル事モ亦必至テアルカ、ソノ結果最モ負擔ノ過重ヲ來タシタノハ、地方的ニ見タ場合ニハ東北地方ノ如キ貧弱縣テアリ、都鄙別ニ見タ場合ニハ市部ニ較ヘテ郡部ノ方ノ負擔カ重クナッテヰル。又之レヲ團体別ニ見

レハ町村稅カ最モ過重テアリ、階級別ニ見タ場合ニハ小額所得者、無產者カ最モ重課サレテヰル。

カクノ如キ地方財政ノ窮乏ハ如何ナル原因ニ基クモノテアルカ。コノ原因ハ既ニ右ニ述ヘタ所ニ依ツテ明ラカナル如ク、最モ根本的ニハ中央財政ノ地方財政ニ對スル優越性、都市ノ部部支配ニ基クモノテアル。然シナカラ中央財政ノ優越性ハ、如何ナル場合ニモ必ラス地方財政ヲ壓迫窮乏化セシムルモノテハナイ。ソレカ壓迫乃至ハ窮乏化ノ型ヲ採ツテ現ハレル場合ハ資本カ凡ユル事物ノ上ニ立ツ場合ニ於テノミテアル。即チ資本主義カ中央財政、都市ヲシテ地方財政ヲ壓迫セシムル最モ基礎的ナル原因テアル。從ツテ地方財政改善ノ唯一最良ノ方策ハ、徹底的ニ資本主義ヲ修正スルニアル。同時ニ資本主義体制下ニ於テハ農業ト農村ハ必然的ニ崩壞過程ヲ辿ラサルヲ得ヤイカラ、根本的ニ地方財政ヲ改善スル方法ハ無イトイフ事ニナル。

經濟現象中ニ於ケル資本主義ノ代表的具現形態ノ一ツハ都部經濟カノ不均衡テアル。コノ不均衡カ地方財政ヲ窮乏セシムル最大原因ノ一ツテ

アル。勿論コノ他ニモ地方財政ヲ壓迫スル幾多ノ原因ヲ數ヘル事ガ出來ルガ、先ツ最初ニ最モ基礎的ノ原因タル都鄙經濟力ノ不均衡カラ考察シヤウ。

都鄙經濟力ノ不均衡ヲ示ス現象トシテハ、人ノ都市集中、富ノ都市集中、地方經濟力ノ不均衡ヲ數ヘル事ガ出來ル（「地方財政改革ノ焦點」—汐見三郎「都市問題」—第二十一卷第二號五頁）

人ノ都市集中　經濟的富ヲ生産スルモノハ人デアリ、マタ人ノ生存スル處ニハ自ラ富ガ存在スル。從ツテ一國內ニ於ケル人口ノ多寡ハ富ノ大小ト略平行スル。

我國ノ人口ハ年々增加シテヰルガ、增加人口ヲ吸收シテヰルノハ市部デアッテ、都部ノ人口ハ殆ンド增加シテヰナイ事ハ次表ニ依ッテ明ラカデアル。

市部郡部別人口與年比較

年次	總數			市部			郡部			千人ニ對スル增減數	
	總數	男	女	總數	男	女	總數	男	女	市部	郡部
明治三一年	四五、四〇二、九六三	二二、六九三、四九九	二二、七〇九、四六四	三、六九二、八三三	一、八九二、一四三	一、八〇〇、六九〇	四一、七〇九、一三〇	二〇、八〇一、三五六	二〇、九〇七、七七四	八一・五	九一八・三
三六年	四七、八二五、二五三	二三、六一五、一〇一	二四、二一〇、一五二	四、三八〇、八九九	二、二〇九、一〇一	二、一七一、七九八	四三、四四四、三五四	二一、四〇六、〇〇〇	二一、九三八、三五四	九一・六	九〇九・七
四一年	五〇、九一一、八六九	二五、一九二、一〇一	二五、七一九、七六八	五、〇九二、一〇一	二、五一九、一〇一	二、五七三、〇〇〇	四五、八一九、七六八	二二、六七三、〇〇〇	二三、一四六、七六八	一〇〇・二	九〇一・四
大正二年	五五、九六三、〇〇〇	二七、六八一、〇〇〇	二八、二八二、〇〇〇	六、三一二、〇〇〇	三、一二一、〇〇〇	三、一九一、〇〇〇	四九、六五一、〇〇〇	二四、五六〇、〇〇〇	二五、〇九一、〇〇〇	一一三・〇	九九二・八
七年	五六、七四五、〇〇〇	二八、〇二一、〇〇〇	二八、七二四、〇〇〇	六、八一二、〇〇〇	三、三九一、〇〇〇	三、四二一、〇〇〇	四九、九三三、〇〇〇	二四、六三〇、〇〇〇	二五、三〇三、〇〇〇	一二一・九	九九三・五
九年	五六、六六七、〇〇〇	二七、九八一、〇〇〇	二八、六八六、〇〇〇	七、一八一、〇〇〇	三、五八一、〇〇〇	三、六〇〇、〇〇〇	四九、四八六、〇〇〇	二四、四〇〇、〇〇〇	二五、〇八六、〇〇〇	一二八・四	九八九・七
一四年	五六、六六七、〇〇〇	二七、九八一、〇〇〇	二八、六八六、〇〇〇	七、一八一、〇〇〇	三、五八一、〇〇〇	三、六〇〇、〇〇〇	四九、四八六、〇〇〇	二四、四〇〇、〇〇〇	二五、〇八六、〇〇〇	一二八・四	九八九・七
昭和五年	五九、七三七、〇〇〇	二九、四八一、〇〇〇	三〇、二五六、〇〇〇	七、九一二、〇〇〇	三、九五六、〇〇〇	三、九五六、〇〇〇	五一、八二五、〇〇〇	二五、五二五、〇〇〇	二六、三〇〇、〇〇〇	一四二・九	一〇一・四
九年	六四、四五〇、〇〇〇	三一、七四一、〇〇〇	三二、七〇九、〇〇〇	八、九一二、〇〇〇	四、四五六、〇〇〇	四、四五六、〇〇〇	五五、五三八、〇〇〇	二七、二八五、〇〇〇	二八、二五三、〇〇〇	一五八・四	一〇八・九

（註）明治三一年カラ大正七年迄ハ國勢調査、大正九年カラ昭和五年迄ハ推計。

市部	郡	人口	増減数	比率 %
		大正九年	大正十四年	
六大都市		四、四九二、〇五一	四、六九九、四二一	一〇五
六大都市		四、四九二、〇五一	四、六九九、四二一	一〇五
其他ノ都市		四、四九二、〇五一	四、六九九、四二一	一〇五

人口ノ増加比較

都市ノ人口増加比較ハ大正九年ト大正十四年トノ国勢調査ニ依リ行ハレタルモノニシテ大正九年ノ人口ハ大正十四年ノ境域ニ依リ修正シタルモノナリ。

六大都市ノ人口ハ百八十万ヨリ二百四十万ニ増加シ十四年間ニ三十三万ノ増加ヲ示シ一年平均二万三千ノ増加ヲ示セリ。

六大都市ノ増加ハ東京・大阪・京都・神奈川・兵庫・福岡ノ六府県ニ於ケル都市ノ増加ニシテ其他ノ都市ハ各府県ニ散在シ其増加ハ一様ナラズ。

又増加ノ百分比ヲ見ルニ六大都市ハ一〇五ニシテ其他ノ都市ハ一一一ナリ。

右表ニ依レハ六大都市ヨリモ其他ノ都市ノ方ノ増加率カ多イヤウニ思ハレルカ、大正九年ト昭和五年トノ間ニ六大都市以外ノ都市數ハ約三十市モ増加シテキルノテアルカラ、増加率ハ六大都市ノ方カ遙ニ多イワケテアル。

カクノ如ク都部ー農村人口ハ殆ント増加シテキナイノニ反シ、市部ー商工業人口ノ増加ハ極メテ多ク、殊ニ六大都市ノ増加カ著シイ。

以上ハ人口ノ増加ヲ都部別ニ見タノテアルカ、コレヲ以テシテモ都市ノ人口ー生産力増加ニ基ク都市ノ經濟的發展ト農村經濟ノ沒落、從ツテ都部間ノ經濟力ノ不均衡ヲ知ル事カ出來ル。

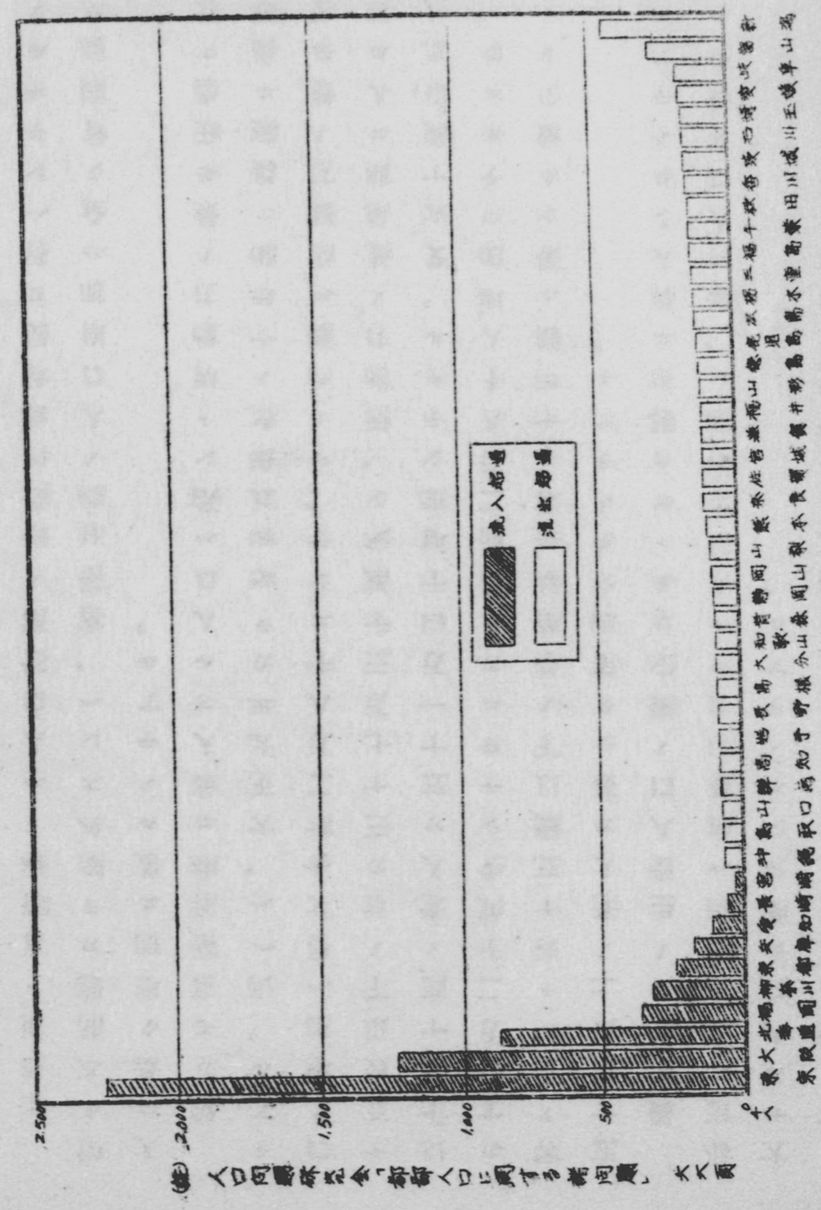
然シナカラ都市人口ノ絶對數カ増加シタカラト言ッテ遽カニ都市ノ生産力カ増加シタトハ言ヒ難イ。問題ハ如何ナル年齢ノ人口カ増加シタカニアル。老幼者數ノ増加ニ依ル人口ノ増加ハ決シテ生産力ノ増加ヲ意味シナイカラテアル。

ソコテ都市人口ノ増加、農村人口ノ停頓狀態ノ内容ヲ見ル事トシヤウ。都市ノ人口増加カ自然増加ニ基クモノテモナク、又地方ノ人口減少カ自

然減少ニ依ルモノテモナイ事ハ既ニ一般ニ知ラレテヰル所テアル。（例ヘハ人口問題研究會「都鄙人口ニ關スル諸問題」六十五頁參照）然ラハ何故ニ都市ノ人口ニハ增加シ、地方ノハ減少スルカト言ヘハ、ソレハ地方民ノ離村向都、移住ニ依リ都市人口カ增加スルノテアル（同上六十六頁）

イマ我國ノ人口移動狀態ヲ見ルニ、六大都市所在府縣、福岡縣、長崎縣ノ八大富裕府縣ト北海道、宮崎ノ合計十道府縣ハ他地方カラ人口カ移入シテヰルカ、ソノ他ノ諸縣ノ人口ハ何レモ前記十道府縣ヘ移出シテヰル。即チ左表ノ如クテアル。

出生府県別人口移動


流入超過
流出超過
流入超過
流出超過
2,500
2,000
1,500
1,000
500
0人
人口同数線より「流出超過」を示す都府県人口
人口同数線より「流入超過」を示す都府県人口
(注) 東京北海神奈川愛媛岩手秋田静岡山梨福島岐阜宮城青森山形富山新潟島根長野鳥取千葉香川岡山愛知宮崎大分熊本佐賀福井秋田高知宮崎奈良山口滋賀和歌山

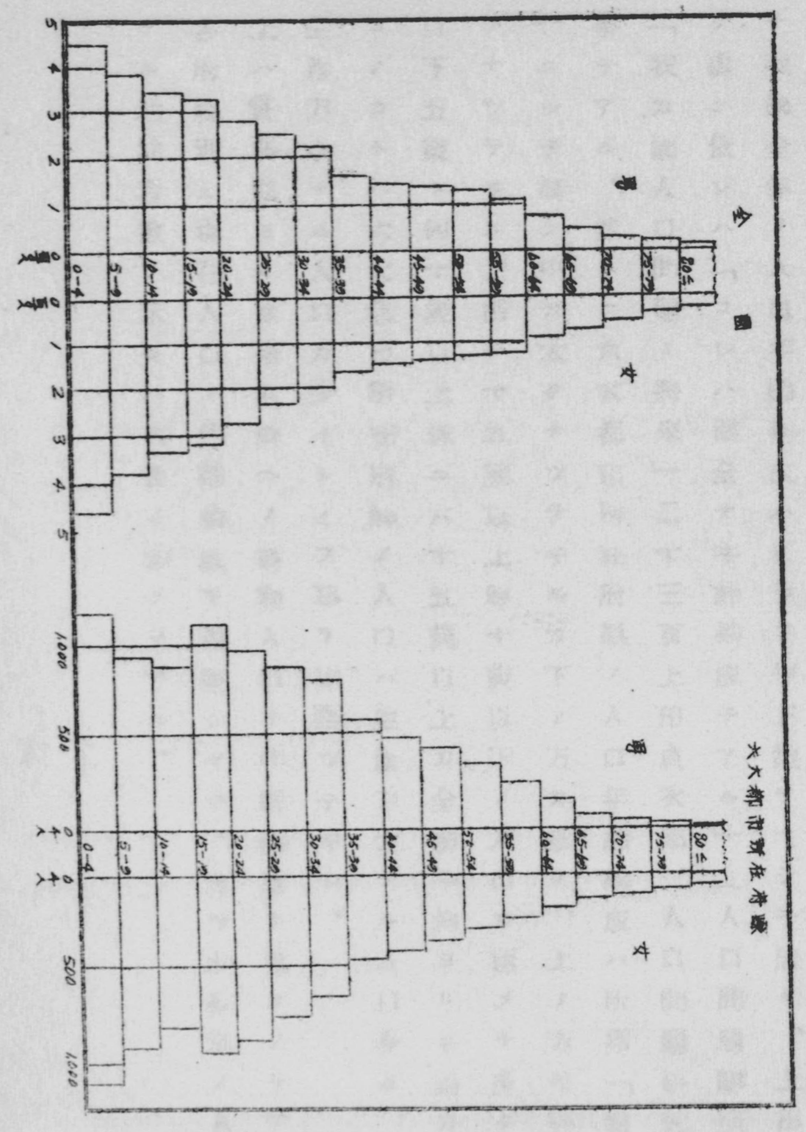
北海道ト宮崎縣トハ人口稀薄ノ結果内地移民カ行ハレテヰルノタカラ斯ク本問題カラ除外スレハ、富裕府縣ノ人口増加ハ全ク貧弱縣カラノ移入ニ基ク増加ニ依ルノテアル。

然カモ富裕府縣ニ移入スル人口ハ殆ント活動力ノ最モ旺盛ナ壯、青年テアル。例ヘハ、大正九年カラ昭和五年迄ノ十年間ニ農業ニ從事スル人口ノ増加ハ男女合計二万八千ニシテ、ソノ内譯ハ活動力ノ最モ旺盛ナ四十五歳以下ノ者カ三十七万三千減少シ、活動力ノ減退期ニ入ル四十五歳以上六十歳ノ老人カ五十一万四千増加シテヰル。又六十歳以上ノ有職者カ十一万二千減少シテヰルカラ結局二万八千人増加シテヰルカ、ソノ内容ヲ見ルト四十五歳以下ノ農業就業者ハ十年間ニ著シク減少セルニ反シ五十歳以上ノ老人カ甚シク増加シタノテアル。

農村ノコノ生産人口ノ減少シタ、ケカ都市ニ流入シタノテアルカラ、都市人口ノ増加ハ生産力大ナル人口カ増加シ、農村人口ノ減少ハ生産力大ナル人口カ減少シタノテアル。

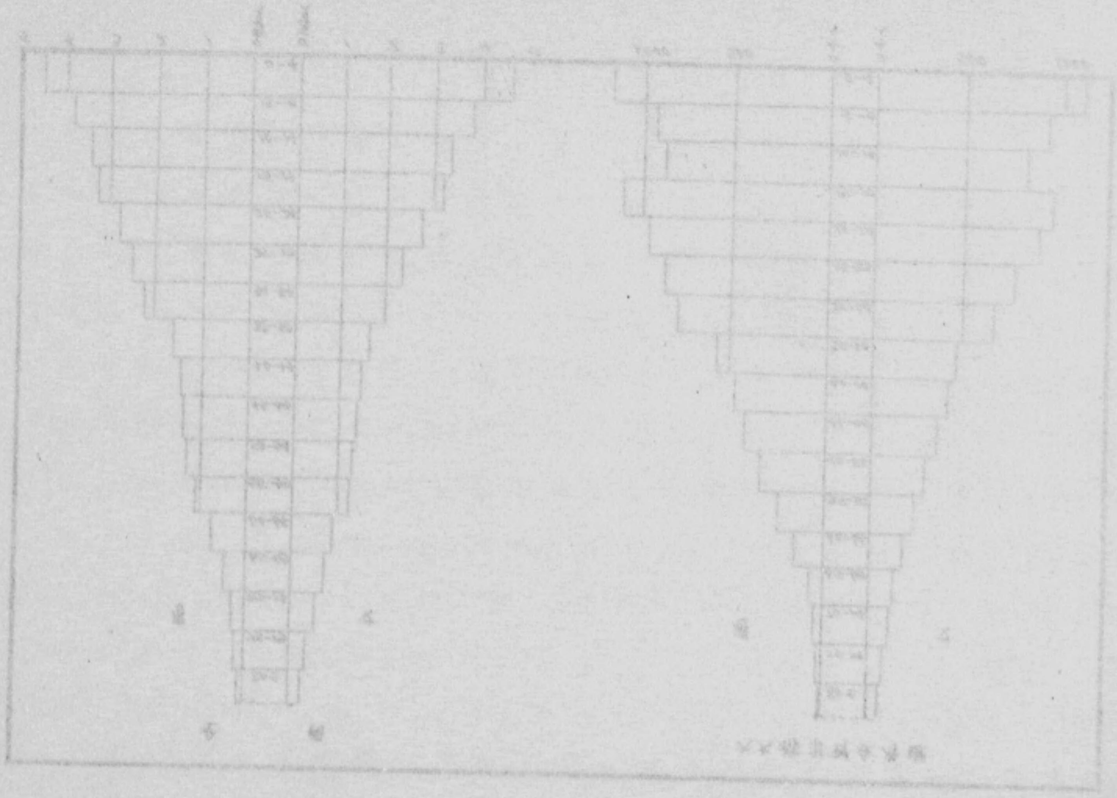
右ノ結果都市ト農村トノ人口構成ニハ著シキ相違ヲ來シテヰルノテア

ルカ、イマ全國ト六大都市所在府縣トノ人口年齢構成ヲ比較表示スレバ次表ノ如クテアル。



(注) 人口面積都市全「都市人口に関する諸問題」七一頁

全國及大大都市所在府縣年齢構成



即チ我國全体ノ人口年齢構成ハピラミッド型ヲナシテ居リ、上田博士ノ説ク處ニ依レハ「コレハ健全ナ年齢構成テアル」（人口問題講演集」中ノ「我カ國人口問題ノ將來」二十三頁上田貞次郎、人口問題研究會）トノ事テアル。然ルニ六大都市所在府縣ノ人口年齢構成ハ所謂「新議事堂型」ニシテ眞ン中カ太クナツテヰルカ下ノ方カ細ク、上ノ方モ亦急激ニ細クナツテヰル。即チ十五歳以上四十歳以下ノ人口カ極メテ多ク、十五歳以下五歳ト四十歳以上殊ニ六十五歳以上カ全國平均ヨリモ遙カニ少イ。コノコトハ六大都市所在府縣ノ人口ハ生産力大ナル人口多ク、幼老者等生産力小ナル人口カ少イトイフ事ヲ物語ツテヰル。

以上ハ貧弱縣ヨリ富裕府縣ヘノ移動人口ノ年齢構成ヲ見タノテアルカ次ニ各府縣別ニ現存人口ノ年齢構成ヲ觀察シヤウ。先ツ府縣別ノ人口中ニ於ケル老幼者數ヲ示セハ次表ノ如クテアル。

府縣別老幼者人口數（附丑年國勢調查）

道府縣	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉
人口	二、一八〇千人	六七四	七八二	一、〇四四	七四〇	一、〇〇四	一、〇九〇	一、二四二	一、一七一	一、〇八六	一、一二五
同上、合計ニ對スル百分比	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
幾歳ノ者ヲ老幼ト看做スカ	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
老	一五一千人	一一四	一二六	一六八	一一九	一六二	一七六	二〇一	一八九	一七五	一八二
幼者	三四	二四	二六	三五	二四	三四	三六	四二	三九	三六	三八
計	一八五	一三八	一五二	二〇三	一四三	一九六	二一二	二四三	二二八	二一一	二二〇
同上、合計ニ對スル百分比	八・五	八・二	八・二	九・七	九・六	九・八	九・七	九・八	八・四	八・一	八・一
幾歳ノ者ヲ老幼ト看做スカ	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
老	一一四千人	八五	九五	一二六	八九	一二二	一三二	一五一	一四二	一三一	一三七
幼者	七一	五三	五七	七八	五五	七五	八一	九三	八七	八一	八四
計	一八五	一三八	一五二	二〇三	一四三	一九六	二一二	二四三	二二八	二一一	二二〇
同上、合計ニ對スル百分比	八・五	八・二	八・二	九・七	九・六	九・八	九・七	九・八	八・四	八・一	八・一

都道府県	人口	増減率	世帯数	一般世帯人員	一般世帯数	施設等の人口	施設等の世帯数
北海道	５１７８８００	０．９	１９７３０５	５０８７９９	１９３７７５	９００１	３０２５
青森	１４２８０３	－０．４	４１７７９	１４０９７４	４１３７９	１８２９	３８０
岩手	１３７３２１	－０．５	４０７７９	１３５４９２	４０３７９	１８２９	４００
宮城	２３５７４３	０．７	７０１７９	２３３９１４	６９７７９	１８２９	４００
秋田	１１３６１４	－１．０	３４１７９	１１２７８５	３３９７９	８２９	２００
山形	１２５３９１	－０．６	３７７７９	１２４５６２	３７５７９	８２９	２００
福島	２１３５２９	－０．３	６４７７９	２１２３００	６４３７９	１２２９	４００
茨城	２８７０００	０．８	８７７７９	２８５１７１	８７３７９	１８２９	４００
栃木	１９３７９８	０．３	５９７７９	１９２１６９	５９３７９	１６２９	４００
群馬	１９３７９８	０．３	５９７７９	１９２１６９	５９３７９	１６２９	４００
埼玉	５８６０００	２．１	１７７７７９	５８２１７１	１７７３７９	３８２９	４００
千葉	５１７８８００	１．９	１５７３０５	５１４７９９	１５６７７５	３０２５	５３０
東京	１１８１０００	２．１	３５７７７９	１１７２１７１	３５５３７９	７８２９	４００
神奈川	７８６０００	１．９	２３８３０５	７８１７９９	２３７７７５	５０２５	５３０
新潟	２４３７９８	０．３	７３７７９	２４１６９	７３３７９	１６２９	４００
富山	１１２７９８	０．３	３４７７９	１１１６９	３３３７９	７６２９	４００
石川	１１７７９８	０．３	３５７７９	１１６６９	３５３７９	７６２９	４００
福井	８５７９８	０．３	２５７７９	８４６９	２５３７９	５６２９	４００
山梨	８８７９８	０．３	２６７７９	８７６９	２６３７９	５６２９	４００
長野	２２７９８	０．３	６８７７９	２２６９	６８３７９	１５２９	４００
岐阜	２０００００	１．９	６０７３０５	１９８７９９	６０７７５	１２０２５	５３０
静岡	３７８０００	１．９	１１４３０５	３７４７９９	１１４７７５	２５０２５	５３０
愛知	６９７０００	１．９	２１０３０５	６９０７９９	２１０７７５	４６０２５	５３０
三重	１８４０００	１．９	５５７３０５	１８２７９９	５５７７５	１２０２５	５３０
滋賀	１３２０００	１．９	３９７３０５	１３０７９９	３９７７５	８６０２５	５３０
京都	２６４０００	１．９	８０１３０５	２６１７９９	８０１７７５	１７２０２５	５３０

都道府県	人口	増減率	世帯数	一般世帯人員	一般世帯数	施設等の人口	施設等の世帯数
北海道	５１７８８００	０．９	１９７３０５	５０８７９９	１９３７７５	９００１	３０２５
青森	１４２８０３	－０．４	４１７７９	１４０９７４	４１３７９	１８２９	３８０
岩手	１３７３２１	－０．５	４０７７９	１３５４９２	４０３７９	１８２９	４００
宮城	２３５７４３	０．７	７０１７９	２３３９１４	６９７７９	１８２９	４００
秋田	１１３６１４	－１．０	３４１７９	１１２７８５	３３９７９	８２９	２００
山形	１２５３９１	－０．６	３７７７９	１２４５６２	３７５７９	８２９	２００
福島	２１３５２９	－０．３	６４７７９	２１２３００	６４３７９	１２２９	４００
茨城	２８７０００	０．８	８７７７９	２８５１７１	８７３７９	１８２９	４００
栃木	１９３７９８	０．３	５９７７９	１９２１６９	５９３７９	１６２９	４００
群馬	１９３７９８	０．３	５９７７９	１９２１６９	５９３７９	１６２９	４００
埼玉	５８６０００	２．１	１７７７７９	５８２１７１	１７７３７９	３８２９	４００
千葉	５１７８８００	１．９	１５７３０５	５１４７９９	１５６７７５	３０２５	５３０
東京	１１８１０００	２．１	３５７７７９	１１７２１７１	３５５３７９	７８２９	４００
神奈川	７８６０００	１．９	２３８３０５	７８１７９９	２３７７７５	５０２５	５３０
新潟	２４３７９８	０．３	７３７７９	２４１６９	７３３７９	１６２９	４００
富山	１１２７９８	０．３	３４７７９	１１１６９	３３３７９	７６２９	４００
石川	１１７７９８	０．３	３５７７９	１１６６９	３５３７９	７６２９	４００
福井	８５７９８	０．３	２５７７９	８４６９	２５３７９	５６２９	４００
山梨	８８７９８	０．３	２６７７９	８７６９	２６３７９	５６２９	４００
長野	２２７９８	０．３	６８７７９	２２６９	６８３７９	１５２９	４００
岐阜	２０００００	１．９	６０７３０５	１９８７９９	６０７７５	１２０２５	５３０
静岡	３７８０００	１．９	１１４３０５	３７４７９９	１１４７７５	２５０２５	５３０
愛知	６９７０００	１．９	２１０３０５	６９０７９９	２１０７７５	４６０２５	５３０
三重	１８４０００	１．９	５５７３０５	１８２７９９	５５７７５	１２０２５	５３０
滋賀	１３２０００	１．９	３９７３０５	１３０７９９	３９７７５	８６０２５	５３０
京都	２６４０００	１．９	８０１３０５	２６１７９９	８０１７７５	１７２０２５	５３０

| | | |

| | | |

即チ十四歳以下ト六十歳以上ノ老幼者数ノ各府縣人口數ニ對スル割合ハ全國平均テ四十四%ニナッテキルカ、富裕府縣程コノ率カ少ク貧弱縣程多クナッテキル・イマコレヲ税務監督局地方ノ比率カ最モ高ク之レニ次イテハ熊本、札幌、廣島、名古屋東京、大阪トイフ順序ニナッテキル・貧弱縣程老幼者等ノ生産力少キ人口カ多イ現狀ニアル・殊ニ六大都市所在府縣ハコノ比率カ極メテ低ク大阪三五%、東京三六%、京都三八%、兵庫四一%、神奈川四一%トイフ風ニ生産力少キ人口數カ極メテ少イ・

カクノ如ク我國人口ノ移動狀況ヲ見ルニ

1.農村人口ノ停滯化傾向ニ反シ都市人口ハ著シク增加シテキル

2.農村人口ノ此相對的減少ト都市人口ノ絶對的增加トノ原因ハ、農村ニ於ケル人口ノ都市流入ノ結果テアル

3.然カモ農村カラ都市ニ流入シタ人口ハ生産性ノ大ナル十五歳以上四十歳以下ノ壯青年テアル

4.ソノ結果農村ニハ老幼者多ク、都市ニハ青年カ多イ

ヨマタ地方別ニ見レハ東北地方ノ如ク貧弱ナ地方ニハ老幼者多ク、大阪地方ノ如ク富裕ナ地方ニハ青年カ多イ。

第二節　富ノ都市集中

現代ノ經濟機構下ニ於テ富カ都市ニ集ルコトハ極メテ當然ナ現象デアル。コノ富ノ都市集中ヲ最モ好ク示スモノハ第三種所得テアラウ。イマ昭和八年度ニツイテ見ルニ、全國ノ第三種所得ハ二十億円ニシテ、ソノ中六大都市ノ分ハ九億円テアリ後者ノ前者ニ對スル割合ハ四十五%トナツテヰル。換言スルナラハ全國ノ富ノ半分ヲ六大都市カ占メテヰルトモ言ヘヤウ。

然カモコノ第三種所得ニ於ケル六大都市ノ割合ハ年々增加ノ一途ヲ辿ツテヰル。例ヘハ昭和元年カラ八年ニ至ル迄ノ間ニ於ケル右ノ割合ヲ見レハ二九・九%、三二・四%、三三・六%、三四・三%、三四・二%、三六・二%、四五・六%、四五・一%トナツテヰル。

又線戸數ニ對スル第三種所得稅納稅戸數ノ割合ヲ見ルニ、昭和八年度

ニ於ケル六大都市ノ總戸數ニ、五五四千戸ノ中第三種所得稅納稅戸數ハ二二一千戸ニシテ、後者ノ前者ニ對スル割合ハ八・七%トナツテヰル。又六大都市ヲ除ク全國ノ總戸數一〇、四二六千戸ノ中第三種所得稅納稅戸數ハ三四八千戸ニシテ、ソノ割合ハ三・四%トナツテヰル。即チ六大都市ニ於テハ百軒ニツキ八軒以上ノ割合テアルカ、ソレ以外テハ百軒ニ三軒ノ割合ニ過キナイ。

次ニ郵便貯金ノ貯金額モ亦貧富ヲ示スシンボルトナツテヰルカラ、六大都市所在府縣ノ貯金高トソノ他ノ縣ノ貯金高トヲ比較スレハ次表ノ如クテアル。

六大都市所在府縣ト其他ノ道府縣トノ郵便貯金額比較（昭和九年度）

	金額	合計額ニ對スル百分比
六大都市所在府縣	一二三七九五八四円	四二・三
其他ノ道縣	一六九七七五三一四〇	五七・七
合計	二九二六八七九一八八	一〇〇・〇

即チ四十七道府縣ノ中ノ僅カニ六府縣カ全國ノ貯金額ノ四二%ヲ占メテヰルトイフ偏在フリテアル。カクノ如ク第三種所得額モ第三種所得稅納稅戸數モ亦郵便貯金額モ共ニ六大都市乃至ハ六大都市所在府縣ノ方カソノ他ノ諸縣ヨリモ遙カニ多イ。コレニ依ツテモ富ノ都市集中カ如何ニ甚シキモノテアルカヽ明ラカテアル。

然シナカラ、右流ノ富ノ偏在ヲ示ス諸材料モ結局ハ結果テアツテ、眞ニ地方財政困窮ノ原因ヲ物語ルモノテハナイ。若シ地方ノ第三種所得額カ右トハ反對ニ六大都市ヨリモ多カツタナラハ、決シテ地方財政ノ困窮トイフコトハ有リ得ナイ。從ツテ地方財政困窮ノ根本原因ハ地方ノ所得カ少イカラテアル。地方ノ所得カ少イノハ、言フ迄モナク地方產業ノ不振ニ依ルノテアル。イマ產業別ニ生產額ヲ見レハ次表ノ如クテアル。

生産總額

	農産	增加率	畜産		林産		水産		鑛産		工産		計	
昭和元年	三五二三五二七千円	一〇〇	二一一五七九	一〇〇	三三二一五六	一〇〇	五一五〇六三	一〇〇	三四六五二一	一〇〇	七〇四三一二二	一〇〇	一一九七〇九七二	一〇〇
一一年	三二三八四四二	九二	二一三三一三	一〇一	三三六七八〇	一〇一	五一四七三〇	一〇〇	三六八五六八	一〇六	六七八八四八七	九六	一一四六〇三二一	九六
三年	三一七九八七一	九〇	二二三六七〇	一〇六	三三五〇五六	七一	五〇一八八九	九七	三七八四七六	一〇九	七二四九五二八	一〇三	一一八六八四九二	九九
四年	三一九〇八〇四	九一	二二五六八二	一〇七	二九八七〇四	九〇	五〇八一八八	九九	三八四五五七	一一一	七七六一六六	一一〇	一二三六九一〇四	一〇三
五年	二一六三四五三	六一	一九三五一四	九一	二一七二五七	六五	五六八九〇五	七七	三〇七六七二	八九	五九九二九〇四	八五	九二七三七〇八	七七
六年	一八〇二五九一	五一	一七七六二八	八四	一九九一五三	六〇	三五九六二六	七〇	二四一八二六	七〇	五二〇二九八四	七四	七九八三八〇九	六七
七年	二一八三九九四	六二	一七三二〇九	八二	二〇五四四六	六二	三五三七七二	六九	二五四七八一	七四	六〇一〇九一一	八五	九一八二一一六	七七
八年	二七二六二四九	七七	一九三五〇五	九一	二四八一一五	七五	四一六八九六	八一	三五四三七二	一〇二	七九〇四四五二	一一二	一一八四三五九一	九九
九年	二三九二五一一	六八	二〇七〇五五	九八	二九一四〇八	八八	四三七一八八	八五	四三二三〇七	一二五	九四二七二九一	一三四	一三一八七七六五	一一〇
十年	二八二八四二七	八〇	二二〇二六〇	一〇四	二九七八四五	九〇	四六三五二七	九〇	五〇四四一九	一四六	一〇八三六八九四	一五四	一三七四八〇一〇	一一五

即チ地方産業タル農業、畜産業、林産業、水産業等ノ生産額ハ何レモ最近減少シツヽアルノミナラス、中心産業タル農産物生産價額ノ減收カ最モ著シイ。

然ルニ都市産業タル鑛産業、工業等ノ生産額ハ昭和五年カラ七年迄ノ三ケ年間ハ世界的不況ノ影響ヲ蒙ツテ一時減少シタカ、爾洲事変ヲ契機トスルインフレーションノ波ニ乘ツテ著ク可キテンポヲ以テ激増シツヽアル。

又各産業ノ重要性ヲ見ルニ、總生産額ニ對スル割合ハ昭和元年ニ於テ農業三〇%、畜産業二〇%、林産業三%、水産業四%、鑛産業二%、工業五九%テアツタカ、昭和十年ニ於テハ農業二〇%、畜産業二%、林産業二%、水産業三%、鑛産業四%、工業七九%ト変化シテヰル。即チ農業ノ三〇%カラ二〇%ヘノ減少ト工業ノ五九%カラ七九%ヘノ増加カコノ十年間ニ於ケル我國産業ノ構成変化ノ特徴ヲナシテヰル。

コノ農村産業ノ沒落ト都市産業ノ勃興トカ一般的ニ農村ノ貧窮化ト都市ノ富裕化トノ原因ヲ爲シテキル。コノ故ニ都市ノ所得ハ増加シテ第三

種所得稅納稅額モ亦增加スルノテアリ、農村ハコレト反對ノ傾向ヲ辿ルノテアルカラ、富ノ都市集中ハ全ク農業ノ沒落ト工業ノ上昇、農村ノ窮乏ト都市ノ繁榮ノ結果テアル。

第三節　地方經濟力ノ不均衡

人口ト富ノ都市集中ノ結果農村經濟カ弱体化シツヽアルコト、並ニ人口ト富トカ富裕地方ニ偏在シテキル事ハ右ニ於テ既ニ述ヘタ所テアルカソコテハ主トシテ六大都市ト其他ノ地方トヲ對比シツヽ考察シタカラ、コヽテハ地方間ノ經濟力不均衡ノ問題ヲ各地方別ニ見ル事トスル。

地方經濟力ノ相違ハ各種ノ標準ニ依ッテ之ヲ知ル事カ出來ルカ、汐見博士ハ人口、土地賃貸價格、私有財產、第三種所得、直接國稅負擔額ノ五種目ニツイテ各地方間ノ經濟力ノ大小ヲ比較シテ居ラレル(一)都市問題第二十一卷第二號十頁)。博士カソコテ利用サレタ材料ハ少々古イカ(人口ハ昭和五年十月一日、土地賃貸價格ハ大正十五年四月一日、私有財產ハ昭和五年末、第三種所得ト直接國稅負擔額ハ昭和六年度)極メテ面

白イ統計表ヲ發表サレテキルカラ。茲ニ之レヲ引用シヤウ。

地方經濟力比較表

	人口（指數）道府縣平均ヲ一〇〇トスル	國土地價格實（指數）道府縣平均ヲ一〇〇トスル	私有財產所得稅（%）	直接國稅額
北海道	三〇四	七〇	一八二	一〇七九
青森縣	六四	四四	四二	二七〇
岩手縣	七一	四四	五七	四〇七四
宮城縣	八三	五一	六五	四七四
秋田縣	七二	七一	六四	三四四
山形縣	七九	五五	七〇	五四二
福島縣	一〇一	七一	八四	四二八
茨城縣	一〇九	八三	一〇六	二九七
栃木縣	八三	九二	八三	四二七
群馬縣	八四	九一	八四	四二七
埼玉縣	一一四	一一五	一一四	四九八
千葉縣	一〇五	一一〇	一〇五	四一八
東京府	二一四	二一四	二一四	一〇一九
神奈川縣	一一四	一一四	一一四	四二八
新潟縣	一〇一	八四	八四	三四二
富山縣	八四	七一	七一	二八四
石川縣	八四	八一	七一	二八四
福井縣	七四	六一	六一	二四七
山梨縣	七四	六一	六一	二四七
長野縣	九一	七一	七一	二八四
岐阜縣	八四	七一	七一	二八四
靜岡縣	一〇一	一〇一	一〇一	三九一
愛知縣	一一四	一一四	一一四	四九八
三重縣	九一	八一	八一	三四二
滋賀縣	八一	七一	七一	二八四
京都府	一〇一	一〇一	一〇一	三九一
大阪府	一一四	一一四	一一四	四九八
兵庫縣	一〇一	一〇一	一〇一	三九一
奈良縣	七一	六一	六一	二四七
和歌山縣	七一	六一	六一	二四七
鳥取縣	六一	五一	五一	二〇六
島根縣	七一	五一	五一	二〇六
岡山縣	八一	七一	七一	二八四
廣島縣	九一	八一	八一	三四二
山口縣	八一	七一	七一	二八四
德島縣	七一	六一	六一	二四七
香川縣	七一	六一	六一	二四七
愛媛縣	八一	七一	七一	二八四
高知縣	七一	六一	六一	二四七
福岡縣	一〇一	八一	八一	三四二
佐賀縣	七一	六一	六一	二四七
長崎縣	八一	七一	七一	二八四
熊本縣	八一	七一	七一	二八四
大分縣	七一	六一	六一	二四七
宮崎縣	七一	六一	六一	二四七
鹿兒島縣	八一	七一	七一	二八四
沖繩縣	六一	五一	五一	二〇六

關ヶ原合戰後德川家ノ領地ハ二百五十萬石ニ增加シ、大藏卿局ハ三萬石ヲ與ヘラレテ大名ノ列ニ加ハツタ。其ノ後ニモ數回ノ加增アリ、寬永十年ニハ十萬石ヲ加ヘラレテ二十萬石ノ大名トナツタ。其ノ間ニ於ケル彼女ノ活動ハ實ニ目覺マシイモノガアツタ。

德川家ニ於ケル地位ハ、大奥ノ權勢ヲ一手ニ握ツテ居タ春日局ニ次グモノデアツタ。彼女ハ將軍ノ乳母トシテ、又將軍ノ生母トシテ、大奥ニ於ケル權勢ヲ一手ニ握ツテ居タ春日局ニ次グモノデアツタ。彼女ハ將軍ノ乳母トシテ、又將軍ノ生母トシテ、大奥ニ於ケル權勢ヲ一手ニ握ツテ居タ春日局ニ次グモノデアツタ。

德川家光　德川家光ノ生母

M・ 德川ノ將軍家ノ悲劇ナリキ。

ハイデロロ。阿ノ勝ヒ時ヨリ後ノ事實ノ永續ヘ月日ノ件。事モノ反映ヲ表示スル點ヲ特記シタイト云フ、事實ニ於ケル政策ノ意義ヲ

| | | |

| | | |

| | | |

第二章　農業生産力ノ累退化ト農業ノ沒落

地方窮乏ト農村ノ疲弊ヲ口ニスルモノハ殆ント異口同音ニ、ソノ原因ハ農産物ノ價格下落カ甚シク農村必需品價格トノ鋏狀差カ甚シクナツタカラタト言ヒ、從ツテ農産物價格ノ引上ケコソ農村救濟ノ唯一ノ方法テアルトナシテヰル。例ヘハ內閣調査局ノ調査ニ依レハ地方財政窮乏ノ原因ハ農村ノ疲弊ニ在リトシ、農村疲弊ノ原因ノ一ツトシテ「——殊ニ農産物ノ價格ハ一般物價ニ比シ低落ノ程度大」ナルコトヲ擧ケテヰル。

事實農産物ノ價格下落カ他商品ニ較ヘテ甚イコトハ明ラカテアル。例ヘハ日本銀行調査局「東京物價調」ニ依レハ、昭和二年ヲ基準トスル同九年ノ一般物價ハ七九ニシテソノ下落率ハ二一%ニ過キナイカ、農産物價ハ六九ニシテ下落率ハ三一%ニ上ツテヰル。從ツテ農産物價格ト農村必需品トハ次表ニ示スカ如ク鋏狀價格ヲナシテヰル。

農産品・農村需要品ノ物価指数

	農産品	農村必需品
明治四十四年	七〇・五%	七三・八%
五年	五三・〇	五五・二
六年	三九・〇	四六・〇
七年	五〇・六	五二・二
八年	五六・五	六〇・二
九年	五六・六	五九・三
十年	五八・四	六四・一
十一年	五六・〇	六七・五

（註）帝國農會「農業年鑑」ニ依ル
大正十四年＝一〇〇

然シナカラ以上ハ過去十年間位ノ狀態テアルカ、若シ長期ニ渉ツテ之レヲ觀察スルト實ハ農產物カ他商品ニ較ヘテ低落率カ甚シイトイフコトカ言ヘナイ。日本銀行調査ニ依ル東京卸賣物價指數ニ依レハ次ノ如ク決シテ農產品ハ他商品ニ較ヘテ安過キルコトカナイ。

昭和十年ニ於ケル東京卸賣物價指數（明治三十三年十月基準）

米	二五二	白木綿	一五〇
大麥	二三〇	木材	二二八
裸麥	二四七	洋鉄	一〇五
小麥	二〇六	洋釘	一〇二
大豆	二二八	銅	一二〇
小麥粉	二一四	セメント	八四
魚肥	一一七	硝子板	一三六
生糸	八八	洋紙	一九二
砂糖	二七三	石炭	二八七
		總平均	一八五

即チ右表ニ依レハ、長期ニ渉ツテ觀察シタ場合米ヲ始メトスル農産物ノ價格ハ工産品價格ニ較ヘテ決シテ安價タトハ言ヒ得ナイ。米ノ如キハ寧ロ高過キル傾向スラアル。若シ農産物下落カ農村窮乏ノ一原因ニ數フルコトカ出來ルトスレハ、ソレハ生絲ー繭ノ價格下落テアラウ。

以上述ヘタ如ク農産物價格カ比較的高價ナルニモ拘ラス農村經濟カ窮迫シタ原因ハ、コレヲ價格現象ノ中ニ發見スル事ハ困難タ。問題ハ寧ロ農産物生産費中ニ占メタル購入肥料ノ割合カ多ク、然モ漸次增加シツヽアルカ爲メ、タトエ農産物ノ價格カ値上リシテモ、ソレタケノ部分ヲ購入肥料ノ支拂ニ當テル爲メ、農民ノ手取リハ値上リ前ト同樣ニ過キナイト言フ所ニアル。從ツテ從來我國ノ農村對策ト言ヘハ殆ント農産物ノ價格吊リ上ケニ終ツテキタカ、カヽル政策カ誤リナルコトハ以上述ヘタ所ニ依ツテ明ラカテアル。

農産物生産費ノ內容分析カ農村對策ノ根本策テハアルカ、同時ニ農業ノ生産力ノ問題モ亦極メテ重要テアル。若シ農業ノ生産力カ大ナレハ、肥料價格カ高クナツテモ（勿論相對的問題テハアルカ）農業經營利潤モ

亦多クナル。工業生産品ノ場合ニハ生産費モ亦高クナリツヽアルユヽ拘ラス利潤カ多クナツテキルノト同様テアル。

然ルニ農業生産價額ト工業ノソレトヲ比較シテ見ルト、工業生産額ノ飛躍的増大ニモ拘ラス農業ノソレハ左程テモナイ。例ヘハ内閣統計局調査ニ依レハ、明治三十八年ヲ一〇〇トスレハ昭和八年ニハ農産額ハ二八六ニ過キナイカ、工産額ハ七一六トナツテキル。然カモ農業生産額ハ最近減少シツヽアル。即チ昭和元年ノ農産額ハ三十五億円ニ上ツテキタカ十年ニハ二十八億円ニ過キナクナリ、同期間ニ於ケル工業ハ実ニ七十億円カラ百億以上ニ飛躍シテキル（第五十三回國勢一班）

以上ハ農業ト工業トノ生産力ヲ對照シツヽソノ發展過程ヲ見タノテアルカ、ソノ他ノ一般産業ト較ヘテ見テモ、最モ農業生産力カ遅レテキル事ハ次表ニ依ツテ明ラカテアル。

産業別生産力比較（一九三一年現在）

	一九〇五年ヲ基準トシタ場合	一九二一年ヲ基準トシタ場合
農業	一六四	一〇三
畜産業	二四二	一〇七
水産業	三五七	一一三
林産業	一四六	九九
鑛業	二四一	一一四
以上ノ原始生産業總指數	一八六	一〇八
製造業	四七五	一七三
全生産業指數	三〇二	一三七

（註）小出保治教授「本邦生産數量指數總覽」ニ依ル。

右ノ統計ハ少々古イカ、今日ノ農業不振ノ原因ハソノ由ツテ來ル所ハ極メテ遠イカラ、却ツテ事實ヲ明カニ示シテヰルトモ言ヘヤウ。右表ニ依レハ農業ノ生産力ハ僅ニ林産業ヨリモ多イタケテ、他ノ諸産業ヨリモ遙カニ劣ツテヰル。殊ニ製造業ト比較シタ場合殆ント問題トナラナイ。又コヽテ注意スヘキ點ハ大正十年以來農業ノ生産力カ殆ント增加シテヰナイトイフ事テアル。

以上ハ農業ノ生産力ヲ他ノ産業ト比較スルコトニ依ツテ、ソノ停滯狀態ヲ明ラカニシタノテアルカ、該産物中ノ重ナルモノ米、小麥、繭等ニツイテ、如何ニソノ生産力カ貧弱テアルカヲ示サウ。米、小麥、繭ノコノ三種類ハ單ニ主要農産物タルノミナラス、ソノ商品性極メテ高ク、我國一般農産物ノ商品性ハ「恐ラク五割以上」（近藤康男「農業經濟論」二四八頁）ニ上ツテヰルカ、ソノ中テモ生産總額中米ハ五五%、小麥ハ八五%、繭ハ實ニ一〇〇%カ商品化サレテヰル。カクノ如ク一般的ニ、我國ノ農業生産力カ極メテ低イハカリテナク、主要農産物ノ商品化率カ極メテ高イカラ、益々農村ニ流入スル貨幣總額ハ減少シ、農業ト農村ハ

資本主義ー都會ー貨幣經濟カラ脫落スルニ至ルノテアル。

ソレハ兎ニ角トシテ農業中ノ主要產物ノ生產力カ如何ニ低イカヲ工業生產物ト比較シツヽ見ルコトヽスル。

米ノ作付段別ハ大正二年ニハ三百万ヘクタールテアツタカ昭和十年ニナツテモ三百二十万ヘクタールニ過キス、過去二十數年間ニ殆ント增加ラシイ增加ヲ見セテキナイ。收穫高モ同樣ニ大正三年ノ一億二百万ヘクトリツトルカラ十年ニハ一億三白万ヘクトリツトルト略々同量テアル。即チ新地單位當リ產額ハ二十年以上モ增加シテキナイコトヽナリ、如何ニ米ノ生產力カ停滯的テアルカヽ明ラカテアル。

麥類モ亦米ト略々同樣テアル。即チ大正二年ノ作付段別ハ百八十万ヘクタールテアツタカ昭和十年ニハ百五十五万ヘクタールトナリ少々減少シタカ、收穫高ハ同期間ニ於テ僅カニ四千五百万ヘクトリツトルカラ四千六百万ヘクトリツトルトナリ、之レモ亦大シタ生產力ノ增加ヲ見セテキナイ。

繭ト生絲トハ流石ニ百パーセント商品化サレテヰルタケニ生產數量ハ

増加シ、ソレニモ増シテ生産總額ノ増加カ著シカツタカ、現在テハ數量モ價額モ共ニ減退シ、殊ニ價格下落率カ著シイ。即チ繭ハ大正二年ノ一億七千万瓩カラ昭和五年ノ三億九千九百万瓩ニ増加シタカ、同年ヲ契機トシテ以後減少シ昭和十年ニハ三億瓩ト八百万瓩カラ昭和十年ノ六千万瓩ニ増加シタカ、價額ハ大正二年ノ二億円カラ大正十四年ノ九億八千万円ニ激増シタノヲ最後トシテ以後漸次減少シ昭和十年ニハ四億円ニ低下シタ。

カヽル農産物ノ生産力停滯化狀態ニ反シテソノ他ノ生産物ノ躍進ニハ眞ニ驚クヘキモノカアル。イマ大正二年ト昭和十年トノ生産數量ヲ見ルニ洋紙ハ二億九千万ポンドカラ十七億ポンド、洋灰ハ六十四万瓲カラ五百五十六万瓲、硫安ハ一万五千瓲カラ四十九万瓲、銑鉄ハ二十四万瓲カラ三百三十二万瓲等々テアル。

勿論銅ヤ石油ノヤウニ生産數量ノ増加シテキナイモノモアルカ、工鑛業ニ於テハ更ラニ之等ノ組材ヲ利用シテ製造工業ニ乘リ出ストカ、他ノ工業ヲ兼營スルコトカ出來ルカラ、生産數量ノ停滯モ敢エテ痛痒ヲ感シ

ナイ。價格カ下落スレハ生産數量ヲ增加シタリ輸出增進ニ依ッテカバースル事カ出來ル。

カクノ如ク農産物ト工産物トヲ個々ノ商品別ニ見テモ、如何ニ農業ノ生産力カ劣勢テアルカヲ知ル事カ出來ル。

カクシテ今日ノ農村窮乏ノ原因ハ價格問題ノ中ニ在ルノテハナク、生産力ノ中ニ在ルトスルナラハ、農業ニ於テモ亦工業ト同樣ニソノ增産ニ努力シサエスレハイヽワケテアル。

處カコヽニ資本主義体制下ニ於ケル農業ト工業トノ相違性カ存スル。工業ニ於テハ比較的容易ニ從來ノ材料乃至ハ設備ヲ以テ種々ノ製品ノ生産カ可能テアルカ、農業ハソノ範圍カ極メテ狹イハカリテナク、他種農產品ノ生產ハ容易テナイ。

又工業ニ於テハ技術向上ノ結果、機械ソノ他ノ發明ト相待ッテ品質ヲ向上セシムル事カ出來、益々時代ノ要求ニ應スル事カ出來ルカ、農業ニ於テハタトエ品質ヲ向上セシムル事カ出來タカラト言ッテ、ソノ需要量ニハ自ラ限度カアリ、時代ノ要求カラ取リ殘サレル可能性カ多イ。數量

カ多クナレハ價格カ下落シソノ方面カラ農業ハ打撃ヲ蒙ル。若シ國内ノ需要カ飽和點ニ達シタ場合ニハ工業ハソノ製造ヲ内外ニ輸出スル事カ出來ルカ、農産品ハ特殊ノモノヲ除ク外カヽル期待ヲ許サレナイ。從ツテ現代ニ於テハ工業ハ殆ント無限ノ進歩向上ヲ望ミ得ルカ、農業ニハコノ希望カナイ。

以上述ヘタ如キ理由ニ依リ、農業ノ生産力ノ增大ハ言フ可クシテ行ハレルモノテハナイカラ、價格政策ニ依ツテモ、又生産力增進政策ニ依ツテモ、今日ノ農業ト農村ノ不振ト疲弊トハ之レヲ救濟スル事カ出來ナイ。

カクシテ地方財政窮乏ノ原因ハ、農産品ノ價格下落率カ他商品ノソレヨリモ大ナルカ故タカラテモナケレハ、又農業生産力殊ニ主要農産品ノ生産力カ停滯シテヰルカラテモナク、実ニ農業ソノモノヽ本質ノ中ニ存スルノテアル。然シナカラ近視眼的ニハ近年ニ於ケル農産品ノ價格下落率ノ大ナルコトモ、生産力ノ停滯化モ共ニ農村疲弊ノ原因タル事ハ勿論テアル。

第三章　收入ト支出トノ不均衡

租税收入ノ增減ニ應シテ支出モ亦增減スヘキテアルコトハ言フ迄モナイ。然ルニ租税ノ減少ホトニハ支出カ減少セサル場合ニハ勢ヒ租税ノ增徴ヲ計ルコトニナルカ、租税收入カ減少スルヤウナ時代ニソノ增徴ヲ計ルノテアルカラソノ負擔カ極メテ過重トナリ、延イテハ滯納額ノ增加トナッテ却ッテ所期ノ目的ニ反スル結果ヲ招來スル。

斯ル場合ニ多クノ税外收入ヲ持ツ團体ナラハソノ方面カラノ收入增加ヲ計ルコトモ出來ルカ、然ラサル團体ハ止ムヲ得ス地方債ヲ募集シナケレハナラヌカ、カ、ル團体ノ募集條件ハ當然不利テアルハカリテナク、再ヒ支出ノ增加トナッテ現ハレルカラ矢張リ財政ノ困難ヲ寛和スル事カ出來ナイ。

從ッテ中央財政ニ於テハ末タシトシテモ、地方財政ニ於テハ極力租稅收入ノ增減ニ應シテ支出ヲ增減セシムル樣ニ努メナケレハナラヌ。然ルニ事実ハ租税收入ノ減少ホトニハ支出カ減少シテキナイ。

収入・支出累年表（昭和元年ヲ一〇〇トス）

	地方税収入	地方支出
昭和元年	一〇〇	一〇〇
二年	九六	一二四
三年	一〇一	一一九
四年	一〇二	一〇七
五年	九二	一一〇
六年	八一	一〇二
七年	七九	一一九
八年	八五	一五八
九年	九一	一四〇
十年	九五	一一五
十一年	一〇〇	一一九

（註）「地方財政概要」ヨリ計算

即チ右表ニ依レハ、世界恐慌當時ノ如キハ租稅收入ノ激減ニモ拘ラス支出ハ却ツテ激增シテキル。コノ增加支出ハ地方債ノ募集、國庫交付金等ノ增額ニ依ツテモ相當賄ハレルノテアルカラ、租稅ノ增徵モ亦行ハレルノテアルカラ、益々地方稅負擔ヲ重課シ、地方財政ヲ逼迫セシムルノテアル。

然シテ租稅收入ト支出トノ鋏狀差ハ府縣ト町村トカ多ク、市ハソノ差カ極メテ少イ。イマ恐慌前ノ昭和四年ヲ基準トスル九年ノ稅收入ト支出トノ割合ヲ見レハ次ノ如クテアル。

	稅收入				支出			
	道府縣	市	町村		道府縣	市	町村	
昭和四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇		一〇〇	一〇〇	一〇〇	
九年	九一	一一三	七三		一三四	一五〇	一〇二	

（註）「地方財政概要」ヨリ計算

即チ市ハコノ間ニ支出ハ五〇%增加シタカ同時ニ稅收入モ亦一三%增

加シテヰル。然ルニ道府縣ト町村トハ稍收入ハ減少シタカ支出ハ逆ニ增加シテヰル。カクシテ租稅收入ト支出トノ鋏狀差ハ道府縣ト町村トカ最モ著シク、ソレ丈ケ財政カ苦シイワケテアル。

タトエ租稅收入カ減少シテモ、稅外收入ノ增加ヲ期待スル事カ出來レハ、支出增加モ敢エテ恐レルニハ足リナイカ、地方債以外ニハソノ不足分ヲ補フ程ノ多額ノ增收ヲ望ムワケニモ行カナイ。ソレテモ市ハ財源カ富豐タカラ使用料、手數料及ヒ賦課金等ノ增收ヲ期待スル事カ出來ルカ道府縣ハ市ノヤウニハ行カナイ。尙ンヤ町村ニ於テハ尙更ラノ事テアル。

カクテ最後ニ借金政策ニ依ランシテモ、町村ノ如キハ信用程度低キ爲メ募集困難ナル上ニ條件カ惡イカ、半官的團体タル道府縣ヤ資力豐カナ市ハ容易ニ之レカ出來ル。

コヽニ於テ借金スラ出來ナイ町村ハ益々誤率ノ引上ケヲ行フニ至ルノテアル。

カクノ如ク租稅收入ト支出トノ不均衡ハ、租稅負擔ノ重課ヲ招クト共ニ、タトエ公債ニ依ッテ一時ヲ糊塗シ得ルトシテモ結局ハ支出ヲ增加セ

シムルニ至リ、地方民政ヲ壓迫スルノ不均衡ノ打破ハ、殊ニコノ事トナレバ。

町村ニ對シテ最モ苛酷ヲ加フルモノアリ。

ム。

モ下ノ如ク公務ニ從ヒ得ル人ト雖モ、

十四、左ノ場合ニ於テハ公務ニ從ヒ得ル人ト雖モ、

一、病ノ爲メ出廳シ能ハザルトキ。

二、天災地變ノ爲メ出廳シ能ハザルトキ。

三、交通機關ノ杜絶ノ爲メ出廳シ能ハザルトキ。

四、其ノ他ノ事故ノ爲メ出廳シ能ハザルトキ。

十五、公務ニ從ヒ得ル人ハ、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

一、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

二、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

三、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

四、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

五、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

六、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

七、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

八、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

九、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十一、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十二、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十三、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十四、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

十五、其ノ職務ヲ行フニ當リ、

第四章　國政委任事務費ノ增加

地方財政ノ窮乏ヲ論スル者ハ殆ント異口同音ニ、ソノ原因ノ一ツトシテ國政事務ノ地方委任ニ依ル歲出ノ增加ヲ擧ケテヰル。

事実議會カ開カレル毎ニ幾多ノ法令カ制定サレ、ソノ法令ニ依ツテ形式的ニハ地方並ニ地方民ノ生活カ救ハレルヤウニ見エテモ、実質的ニハソノ事務ノ遂行ニハ地方團体ノ經費ノ支出ヲ要スルコト、ナリ、ソレ丈ケ地方財政ヲ壓迫スルニ至ルノテアル。個々ノ委任事務費ハ大シタ事カナイトシテモ、大ハ教育費カラ小ハ公報發行費、揭示場費ニ至ル迄ヲ數フレハ、ソノ手數ト經費トハ莫大ナ額ニ上ツテヰル。

今日ノ地方制度ハ地方自治トハ殆ント名ノミニシテ事実ハ中央政府ノ下請行政ヲ行ツテヰルニ過ギナイ。鉄道局、遞信局、各種試驗場、鑛山監督局等ノ特殊行政地方官廳ヲ除イタ國家ノ行政ハ、結局市町村ヲソノ手足トシテ運營スル事ニ依ツテ組織サレ活動シテヰルノテアルカラ、新法令一ツ施行スルニモソレカ地方財政ニ及ホス影響ハ決シテ少クハナイ昭和七年ノ時局匡救費ハ確ニ一時的ニハ地方救濟ノ效果カ有ツタカモ知

レナイカ、之レカ爲メニ却ッテ不急ノ事業ヲ起シタリ或ハソノ実力ニ不相應ナ經費ヲ支出シタ結果、昭和十年ニ時局匡救費ヲ打切ッタ爲メ、地方債ノ起債ニ依ッテ經費ヲ支出シテキタ市町村ハ公債ノ元利拂ノ補助ヲ得ラレナクナリ、却ッテ財政ノ窮迫ヲ告ケテキル所カ多イ。時局匡救費ノ打切リハ、最早地方救濟ニ努力シナクテモ立派ニ地方財政カヤッテ行ケルヤウニナッテ始メテ打切ルヿキテアルニモ拘ラス、三ケ年ノ期限カ來ルトソノ結果ノ如何ヲ問ハスニ打切ッテシマッタ。甚タ無責任ナヤリ方テアルカ、中央ノ法令一ッテ地方ノ歲出ハ增加シ、ソノ結果ハ更ニ地方財政ヲ逼迫セシメテ居ルノテアル。

カクノ如ク中央政府ノ爲ス所凡テ地方團体ニ大ナル影響ヲ及ホスノテアルカラ、事毎ニ地方ヘノ委任事務ノ增大トナリ、地方團体ノ經費ヲ膨脹セシメテキルノテアル。イマ内務省調査ニ依ル地方費中ニ於ケル國政事務費ノ割合ヲ道府縣、市町村別ニ見レハ次ノ如クテアル。（以下年度ハ總テ昭和九年度當初豫算）

道府縣費中ニ於ケル國政事務費ノ割合

科目	國政事務費 主要費目	金額
神社費	神饌料、幣帛料	二四〇千円
教育費	師範學校費、中學校費、高等女學校費、実業學校費、圖書館費	一一六九六三
土木費	道路橋梁費、治水堤防費、港灣費	九六九一一
衛生費	各種傳染病豫防費、屠畜檢査費	一七五四〇
社會事業費	救護費、少年救護院費、行路病人、死亡人諸費、精神病院及同病者監護費	七三一九
警察費	警察費、警察廳舍、建築修繕費	八五一一六
職員費	官吏及待遇官吏ニ関スル諸費（他ノ科目ニ計上セルモノヲ除ク）	一五〇五一
衆議院議員選舉費	費用辨償、備品費、消耗品費、通信運搬費	四四一
諸達及掲示諸費	公報發行費、掲示場費	八六

都市計畫費	都市計畫地方委員會費、都市計畫事業費	一四〇八二
道府縣廳舍費	道府縣廳舍建築費、同修繕費	一、四三五
勸業費	地方森林費、地方測候所費、各種試驗場費、種畜場費、蠶業取締費、農林水產物及商品檢查費、獸疫及畜牛結核豫防費、害蟲驅除豫防費、造林費、開墾及耕地整理費、荒廢地復旧費	八五七五八
計		四四〇九四〇
道府縣費總額ニ對スル割合		〇・七五八

（註）內閣調査局「地方財政改善ニ関スル中間報告」ヨリ引用

石表中國政事務タル性質ヲ特ニ濃厚ニ及ヘルモノ

科目	目	金額
神社費	同右	二四〇
教育費	師範學校費	八七一五
	小學校教員加俸恩給及住宅補助	四一一五七
土木費	國道費	一四七二二
	河川費	一四四三二
	砂防費	一二〇七
衛生費	各種傳染病豫防費	六六三六
社會事業費	救護費	一六六〇
	行路病人死亡人諸費	五〇二
	精神病院及同病者監護費	二〇八
	少年救護院費	五六九
警察費	同右	八六一一六
職員費	地方官々制、北海道廳官制、警視廳官制、都市計畫委員會官制ニ依ル官吏ノ俸給	五〇〇四
衆議院議員選舉費	同右	四四一

諸達及掲示諸費	同右	八六
都市計畫費	都市計畫地方委員會費	一、一五六
道府縣廳舍費	同右	一、四三五
勸業費	地方森林會費	一一
	地方測候所費	七〇八
	農村水產物及檢査費	七、九四八
	蠶業取締費	一、九〇六
	獸疫及畜牛結核球防費	二三三
計		一九五八九〇
道府縣費總額ニ對スル割合		〇・三二八

（註）「同　前」

（註）「同　前」

場合	情	業	務
道府縣總額ニ對スル			
一九・三二八		府縣及市町村ノ	學校教育費
一九・八六〇		同	土木費
二・〇三三		道府縣ノ	勸業費
一・七〇〇		同	土木費
一・一四〇		同	衛生費
一・一四〇		同	警察費
一・一四〇		同	社會事業費
一・一四〇		同	教育費
一・一四〇		同	其ノ他ノ費用
一・一四〇		市町村ノ	勸業費
一・一四〇		同	衛生費
一・一四〇		同	社會事業費
一・一四〇		同	其ノ他ノ費用
一・一四〇		同	土木費
一・一四〇		同	警察費
一・一四〇		同	教育費
一・一四〇		同	其ノ他ノ費用

即チ道府縣費總額中ノ國政事務費ノ割合ハ実ニ七四%ニ上ッテヰル。乙レテ見レハ道府縣ノ仕事ハ殆ンド國政事務テ占メテヰルト言ッテモ大シテ過言テハナイ。然シテ特ニ國政事務費ノ性質ヲ帶ヒタ金額ハ、ソノ支出總額ノ三三%ニ上ッテヰル。道府縣カ半官的自治團体テアル性質ヲ考慮スレハ、國政事務費カ斯クノ如キ多額ニ上ッテヰルノモ或ハ止ムヲ得ナイカモ知レナイカ。更ラニ又資本主義社會組織ニ於テハ凡ユル地方機関ヲ中央ノ目的ノ爲メニ動員スルノカ當然ナ成行カモ知レナイカ、カカル結果カ現在ノ地方ノ疲弊ヲ釀ラシタ點ヲ考ヘレハ、地方ヲヨリ多ク利用センカ爲メニモ、地方機関ハ出來ル限リ地方ノ事務ヲ行フヤウニシテオイタ方カイ、ト思フ。

尤モ道府縣ヲシテ斯ル多額ノ委任事務費ヲ負擔セシムルニ對シ、中央ハ補助費、交付金等ノ名目テ相等ノ額ヲ支出シテ居ル。然シ交付金額ハ道府縣ノ実際負擔額ヨリモ遙カニ少イ。即チ道府縣ノ昭和九年度當初豫算ニ依ル歲出總額五億九千八百万円ニ對シ、國家ノ支出額ハ七千一百万円テアルカラソノ割合ハ一二%ニ過キナイ（内閣調査局「地方財政改善

ニ關スル中間報告」七六頁參照）然ルニ道府縣ハ國政事務ニ四億四千万円ヲ支出シナカラ僅ニ七千一百万円シカ補償サレナイノタカラ、結局三億七千万円ノ持チ出シトイフ事ニナル。之レハ當然中央カラ道府縣ニ支拂フヘキモノテアル。

次ニ市町村ノ委任事務費ヲ見レハ次表ノ如クテアル。

市町村費中ニ於ケル國政事務費ノ割合

科目	國政事務費	
	主要費目	金額
教育費	小學校費、幼稚園費、實業補習學校費、中等學校費、青年訓練所費、圖書館費	二〇九七五〇千圓
土木費	道路橋梁費、汚物掃除費、下水道費	七八九八四
衛生費		
勸業費	商品陳列所費、産業奬勵費	二六七二〇
社會事業費	救護費、職業紹介所費	九〇四二

都市計費	四八八九					
役所役場費	四四〇九					
警備費	一〇一五	水火消防費				
計	五四九四三一					
市町村費總額ニ對スル割合	〇・四二一					
道府縣ト市町村トノ合計	九八八三七一					
地方費總額ニ對スル割合	一二五・〇					

（註）「同前」

石表中國政事務タル性質ヲ特ニ濃厚ニ帶ベルモノ

科目	費目	金額 千円
教育費	尋常小學校費、青年訓練所費	二四七、一二九
土木費	國道費	三、五三三
衛生費	傳染病豫防費	一一、六六七
社會事業費	同右	九、〇四三
役所役場費		二四、六四〇
警備費	同右	一〇、一五五
計		三〇六、一六七
市町村費總額ニ對スル割合		〇・二三五
道府縣ト市町村トノ合計		五〇二、〇五七
地方費總額ニ對スル割合		〇・二八五

（註）「同　前」

即チ市町村ハ國政委任事務費トシテ金々ソノ歳出總額ノ四二%ヲ支出シテヰルノデアルカ、ソノ中特ニ國政事務タル性質ヲ帶ヒテヰル額ノミヲ見テモ二四%ニ上ッテヰル。地方自治ヲ標榜スルワカ地方制度ニ於テ經費ノ斯ル大部分ヲ委任事務ニ費シテヰタノデハ、市町村ハソノ固有事務カ竦カニナリ稅源ノ涸渇ヲ招クハ當然デアル。

コノ委任事務ニ對シテ中央ハ下渡金ヲ交付シテヰルノデアルカ、ソノ金額ハ實際ノ經費ヨリモ遙カニ少イ。即チ前揭資料ニ依レハ、市町村ノ歳出總額十三億円ノ中國庫ノ負擔額ハ一億三千四百万円デアルカラソノ割合ハ僅カニ一〇%ニ過ギナイ。然ルニ歳出總額ノ中委任事務費ハ五億四千七百万円デアルカラ國庫負擔額一億三千四百万円ヲ差引イテモ結局市町村ハ四億一千万円ノ足ヲ出シテヰルワケタ。

以上述ヘタ如ク道府縣、市町村ヲ通シテ地方團体ハ九億八千八百万円ノ委任事務費ヲ支出シ、之レニ對シテ國家ハ二億五百万円負擔シテヰルカラ地方團体ハ七億八千万円ノ巨額ヲ無意識ノ中ニ負擔セシメラレテヰ

ルノテアル。コノ巨額ヲ年々地方經濟ノ開發ニ注入シテソノ稅源ヲ滋養スルト共ニ、地方負擔ノ輕減ニ努メタナラハ、自ラ地方稅源ヲ豐富ニシ地方自治ノ円滿ナル發達ト相待ッテ中央モ亦自ラソノ餘德ヲ享受スル事カ出來ルノタカ。

以上述ヘタ所ハ主トシテ內務省ノ調査資料ニ基イテ如何ニ委任事務費カ地方財政ヲ壓迫シテヰルカノ程度ヲ見タノテアルカ、事實ハコノ程度ハ更ラニ甚シイノテアル。殊ニ內務省ノ資料テハ市町村ヲ一括シテ取扱ッテヰルカ、人口六百万人ノ大東京市ト僅カ二、三百人ノ山間ノ僻村トヲ一括ニ扱フ事ハ正當ナ方法テハナイ。ソコテ六大都市、ソノ他ノ市、町村トイフ區分ニ從ッテ今少シク細密ニ委任事務費ト地方財政トノ關係ヲ見テミヤウ。

內務省ノ推計ニ依レハ市町村ノ委任事務費ハ昭和九年度當初豫算ニ依ッテ五億五千万円テアッタカ、地方團体側ノ計算ニ依レハ七億五千万円以上ニ上ッテヰル。（「都市問題」昭和十年八月號一六九頁參照）然ルニ同年ノ市町村歲出總額ハ十三億円テアルカラソノ割合ハ實ニ五八

| | | |

計	其他	市債	電氣	鐵道	産業
六六、九三九、四五九	三三、四九二、五五五	二八、三一五、四九九	九、八六七、一一一	四、八四九、三二四	一、六四〇、八三六
〇・四六	〇・三五	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
三〇、九三二、四一一	九、三二九、五五五	一一、八六三、三三三	一、〇四五、一一一	四、三二九、一一一	一、三四五、八三六
一、〇四六、一一一	一、〇四六、一一一	一、〇四六、一一一	一、〇四六、一一一	一、〇四六、一一一	一、〇四六、一一一
〇・四三	〇・四〇	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
九、〇四三、四五九	三、四五九、〇〇〇	三、〇四五、四五九	一、〇四五、一一一	一、四五九、〇〇〇	一、〇四五、八三六
〇・四六	〇・四〇	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
四、四六九、一一一	一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、〇四五、一一一	一、四五九、〇〇〇	一、〇四五、八三六
〇・四六	〇・四〇	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、〇四五、一一一	一、四五九、〇〇〇	一、〇四五、八三六
〇・四六	〇・四〇	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、〇四五、一一一	一、四五九、〇〇〇	一、〇四五、八三六
〇・四六	〇・四〇	〇・四〇	一	〇・三五	〇・一五
一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、三七九、一一一	一、〇四五、一一一	一、四五九、〇〇〇	一、〇四五、八三六

（日本円換算）政府債借換償還額

レテ行ヒ得ス、町村ハ財政ニ余裕アルトキハ、カンタンニ公債ヲ償還シテモヨイ。

（註）大阪市役所大塚辰治氏ノ計算ニ依ル「都市問題」第二十一巻第二號一七〇頁ヨリ引用

石炭ニ關スル委任事務ノ負擔ハ、都市ニ於テハ、六大都市ハ四六%、町村ニ於テハ、五%ノ負擔ヲ行ハシメテヰルガ、町村ノ出ノ他ノ燃料ニ關スル委任事務ノ負擔ハ、都市ニ於テハ、五%ノ負擔ヲ行ハシメテヰルガ、町村ニ於テハ、一〇%ノ負擔ヲ行ハシメテヰル。

ナ負擔ヲ重課サレ、租稅ヲ納メル爲メニ働イテキルヤウナ狀態ニアッテ血稅ヲ拂ヒナカラ、得ル所ノモノハソノ負擔ノ極少部分ニ過キナイ。實ニ地方財政ハ、殊ニ町村財政ハ水年ニ渉ッテ斯ル不公平ナ待遇ヲ受ケテ來タノテアルカ、ソレカ今日地方財政ノ窮乏、農村ノ疲弊トナッテ最近表面化スルニ至ッタノテアル。農村ノ救濟、地方財政ノ改善ヲ口ニスルモノハ、何ヨリモ先ッ最モ可能性アル、コノ委任事務費ノ押壹リヲ廢メナケレハナラヌ。

以上ノ委任事務費ニ對スル國家ノ交付金ハ次表ニ示スカ如ク一億二千万円ニ過キナイカラ、ソノ割合ハ僅ニ一六%テアル。

國政事務費分擔割合（單位千円）

	國政事務費推算額	國庫下渡金	國庫交付金	國庫補助金	計	差引不足	負擔割合 國庫	負擔割合 市町村
六大都市	三〇九二二七	七一二六	一九〇五	一五九三六	二四九六八	二八四二五九	八	九二
其他ノ市	九〇九七五	六七二五	七七二	三〇二三	一〇五二〇	八〇四五五	一一	八九
町村	三五〇九一六	七三一五九	二七二四	九五四二	八五四二五	二六五四九一	二四	七六
計	七五一一一八	八七〇一〇	五四〇一	二八五〇一	一二〇九一二	六三〇二〇六	一六	八四

（註）「同　前」一七一頁

歳出總額ニ對スル委任事務費ノ割合カ最モ多カツタノハ町村テ、之レニ次イテハソノ他ノ市テアツタカ、委任事務ニ對スル國庫ノ分擔金ノ割合ハ町村カ最モ多ク、六大都市カ一番少イ。コレテ見ルト町村ハ委任事務費モ多イカ同時ニ國庫分擔金モ多イカラ、コノ點ニ関シテハ最モ有利ナ狀態ニアルヤウニ見エルカ、事実ハ却ツテ逆テアル。何ントナレハ町

村ハ委任事務費カラ國庫分擔金ヲ差引イテモ、ソノ歳出總額ニ對スル割合ハ依然トシテ他ノ團体ヨリモ遙カニ高率タカラテアル。

從ツテ委任事務費ノ爲メニ最モ損害ヲ蒙ツテヰルノハ町村財政テアリソノ他ノ市カ之レニ次キ、六大都市ハ三者中最モ影響カ輕微テアル。

以上述ヘタ如ク、國政委任事務增加ノ結果地方財政ハ自ラ膨脹スルニ至リ、之レニ對スル國庫ノ費用分增額極メテ少ク、タメニソレタケ租稅ノ重課ト地方經濟ノ疲弊トヲ招イテヰル。殊ニ町村ノ委任事務費ノ割合カ最モ多イ。

第五章　教育関係支出ノ増大

地方歳出中教育費ノ割合ヲ最モ大ナル部分ヲ占メテ居リ、コレカ地方財政ヲ膨脹セシメ、延イテハ地方税ヲ重課セシメテヰル事ハ既ニ多クノ人々ニ依ッテ論證サレタ所テアル。例ヘハ昭和十一年度當初豫算ニ依レハ地方歳出總額十九億円ノ中教育費ハ実ニ四億七千万円ニ上リ、前者ニ對スル割合ハ二五%テアル。然カモソノ増加率ハ衛生費、勧業費、社會事業費等ニハ及ハナイカ、ソレテモ昭和元年ヲ一〇〇トスレハ十一年ニハ一一三%ニ増加シテヰル。

コノ地方歳出ニ對スル教育費ノ割合ノ最モ大ナルハ町村ニシテ、町村ハソノ歳出總額ノ約半額ヲ教育費ニ當テ、ヰル。カクテ町村ノ事業ト言ヘハ殆ント小學校ノ經營ニアルカノ觀ヲ示シテヰルノテアルカ、直接生産的ナラサル義務教育費ニカ、ルカノ如ク莫大ナル經費ヲ當テ、居ル結果、町村ハ積極的ニ自己ノ經濟的發展ヲ計ル諸事業ヲ經營シ得サルニ至リ、カクテ地方經濟ハ衰微セサルヲ得ナイ狀態ニ立至ッテヰル。アル人ノ如キハ教育費ハ町村財政ノ癌テアルト迄格言シテ居ル（岡野文之助「我國地方

財政ノ現狀」都市問題第二十一卷第二號四四三頁）

教育費中ノ重ナルモノハ小學校教員俸給費ニシテ、教育費中ノ割合ハ漸次增加シツヽアル。イマ市町村ニ於ケル歳出總額、教育費、小學校教員俸給費ノ增加率ヲ見レハ次表ノ如クテアル。

市町村歳出總額、教育費總額及小學校教員俸給費增加率比較

	歳出總額 %	教育費總額 %	小學校教員俸給總額 %
大正十四年度	一〇〇	一〇〇	一〇〇
昭和元年度	一一四	一一〇	一〇四
二年度	一四七	一一八	一〇九
三年度	一四〇	一二二	一一四
四年度	一二二	一一五	一一七
五年度	一二七	一〇〇	一一七
六年度	一一二	九四	一一五

七年度	一二七
八年度	一四二
九年度	一三一
	九八
	一〇二
	一〇九
	一一七
	一二二
	一二六

（註）文部省普通學務局「地方教育財政一班」ニ依ル
昭和七年度迄ハ決算八年度以降ハ豫算
歳出總額ハ七年度迄ハ内務省「地方財政概要」ニ依リ七年度以降ハ普通學務局ノ調査ニ依ル
教育費總額ハ七年度迄ハ「文部省年報」ニ依リ八年度以降ハ「地方財政概要」ニ依ル
小學校教員俸給費總額ハ七年度迄ハ「文部省年報」ニ依リ八年度以降ハ普通學務局調査ニ依ル
本表ハ内閣調査局「地方財政改善ニ關スル中間報告」ヨリ引用ス

即チ教育費總額ハ既ニ飽和點ニ達シテキルノテ、ソノ增加率モ大シタ

過テハナイカ、小學校教員ノ俸給費ノ方ハ右ノ如クニ激增シテキル。

コヽニ於テ義務教育費ノ問題ハ主トシテ小學校教員ノ俸給費ニ關スル問題テアリ、義務教育費全額國庫負擔カ叫ハレル所以テアル。

然シナカラ義務教育費カ地方財政ノ過重ノ負擔トナツテキルノハ敢テ市町村ノ問題タルノミナラス、府縣ノ財政ヲモ相當ニ壓迫シテキルノテアル。

府縣教育費ノ中師範學校費カ相當ノ財政負擔トナツテキル事ハ明ラカニシテ、既ニ府縣財政救濟ノ爲メニ師範學校費ノ整理、節約カ主張セラレテキル（三好重夫「地方財政ノ実際問題」一二〇頁）然シ義務教育費ト直接的ニ關聯シテ大キナ負擔トナツテキルモノハ小學校教員等ノ恩給費テアル。

道府縣教育費ハ大体一億円テアルカ、ソノ中恩給費ハ昭和五年度ニ於テ二千八百万円テアルカラ、ソノ割合ハ実ニ二八%ニ上ツテキル。今日テハコノ比率ハ更ラニ多クナツテキルト思ハレルカ、如何ニ恩給費ノ增加率カ大テアルカラ次表テ示サウ。

道府縣費支辨教育職員恩給總額增加狀況

	恩給總概	同上指數
	円	
昭和元年度	一九〇二七一二二	一〇〇
二年度	二一二五八八〇五	一一一
三年度	二二五八二九〇〇	一一八
四年度	二五四七五六九〇	一三三
五年度	二七八六八一七〇	一四六

（註）内務省調査

内閣調査局「地方財政改善ニ関スル中間報告」ヨリ引用

右表ニ依レハ恩給費ノ増加率ニハ極メテ著シキモノカアリ、五年度ニ於テ既ニ教育費ノ一二八%ニ上ッテキルカラ、コレカ教育費ヲ膨脹セシメル程度ハ甚タ大キイ。

延イテハ地方財政ヲ壓迫スル程度ハ甚タ大キイ。

以上述ヘタ如ク義務教育費ハ地方財政殊ニ町村財政ヲ壓迫シテキルノ

テアルカ、町村カカ、ル莫大ナル費用ヲ投シテ教育シタ兒童ハ、ヤカテ成長スルニ從ッテ都會ニ出テ其處テ生產事業ニ從事スル結果、農村ハ切角費用ヲ掛ケナカラソノ收穫ハ都會ニ取ラレル事トナル。カクシテ農村ハ苦ルシイ財政ノ大半ヲ割イテ教育シツヽ、都會ニ奉仕シテキルノテアルカラ、農村ノ沒落ト都會ノ發展ハコノ點カラ見テモ極メテ當然ナ歸結テアル。義務教育タル以上全額國庫負擔トスヘキニモ拘ラス地方團体ニソノ負擔ヲ轉嫁シ、然カモソノ結果ハ都市ヘノ人口移動トナッテ利益ハ都會ニ取ラレルノテアルカラ、何ントシテモ義務教育費ノ地方負擔ハ不公平テアル。カクシテ教育費ハ教育兒童ノ都市移住ト共ニソノ側カラ地方財政ヲ壓迫シテキルノテアル。

第六章　補助費、奨勵費ノ濫用

昭和十一年度當初豫算ニ依レハ地方ノ稅外收入十二億五千万円ノ中補助及交付金ハ二億二千万円ニシテ、冥ニ前者ノ二〇%弱ニ當ツテヰル。コノ補助及交付金カ如何ニ使用セラルヽカハ地方經濟ニ及ホス影響カ極メテ大テアル。若シ有效ニ使用サレテ地方經濟ノ發展ニ役立ツナラハ、ソレハヤカテ地方財政ノ窮乏ヲ幾分テモ緩和スル作用ヲ爲ステアラウカ若シ惡用サレヽハ逆ニ地方財政ヲシテ益々惡化セシムルテアラウ。

右ノ二億二千万円ハ補助金ト交付金トカラ成リ、全部カ補助費、奨勵費テハナイカ、ソノ中少ナクトモ數十万円ハ補助費テアラウカラ、コレカ地方財政ニ及ホス影響ハ決シテ少クハナイ。更ラニ交付金ト雖使用方法ノ如何ニ依ツテハ善惡イツレニモ作用スルカラ、便宜上二億二千万円カ全部補助金的作用ヲ行フモノトスレハ、ソノ使用ノ方法ハ極メテ愼重テナケレハナラヌ。

然ラハ果シテコノ莫大ナル補助金ハ如何ナル風ニ使用サレテヰルタラウカ。補助金交付ノ目的ニ適ツタ樣ニ使用サレテヰルタラウカ。答ハ否

念ナカラ否ト言ハサルヲ得ナイ様ナ状態ニアル。例ヘハ某縣テハ五百円ノ土木事業費ヲ得ル爲メニ千円ヲ使ツタ村カアリ、又他縣テハ畑ノ中ニ無雜作ニ桑ノ枝ヲ突込ンテ植付ヲ行ヒ桑園改良奬勵費ヲセシメタリ、甚シキニ至ツテハ米作地方テ桃ノ實カ不作タカラト言ツテ補助費要求ノ陳情ヲシタ地方カアルトイフ事テアル（引例ハ凡テ内務事務官三好重夫「地方財政ノ實際問題」一三九頁等ヨリ引用、以下同）コレナトハ補助金ノ性質ヲ取リ違エテ徒ラニ地方民ニ他力依頼心ヲ起サシメ、コレヲ悪用シタ結果テアル。コレ等ハマタ小サイ方タカ大キイノニナルト某縣ノ用排水改良事業ハ總額約六十万円テ計畫サレ、ソノ財源ニハ二分ノ一國庫補助、四分ノ一宛縣費及地元負擔ヲ以テ充テル事トシタカ（縣費負擔ハ實質的ニハ補助金ト同一テアル）ソノ結果ハ地主ノ投資額ハ約二十六万円トナルニ對シ、ソノ事業施行ニ依ル利益ハ、收量增加ニ依ル恒久的利益毎年約八万四千円、地價差增ニ依ル一時的利益六十五万円トナツタト言フ。

カヽル事例ハ枚擧ニ遑カナイカ、右ニ擧ケタ二、三ノ例ニ依ツテ明ラ

カナル如ク、今日ノ補助金、奨励金ハ徒ラニ地方民ヲシテ依頼心ヲ起サシメタリ、之レヲ悪用セントスル誘惑トナツテキルハカリテナク、更ラニ地方有力者ノ個人的利殖ノ手段ニ供セラレテキルノテアル。

或ハ又政黨員カ選擧民ノ人氣ヲ博サントシテ種々運動シ、左迄必要テラサルニモ拘ラス補助金ヲセシメタ場合ハ極メテ多イ。又トウセトレルモノナラモラハナケレハ損タトハカリニ補助金欲シサニ不急ノ事業ヲ起シタリ、実力不相應ノ設備ヲシタリシテ、後ニソノ維持費ノ支出ニ困ルトイフ様ナ例カ多クアル。

尤モ補助金ノ總テカ斯ル風ニ使用支出サレテキルワケテハナイカ、相當額カ補助金ノ性質カラ離レテ使用サレテキルノテアル。若シ本來ノ目的ニ合致シタ方法テ使用サレタナラハ、幾分テモ疲弊セル地方經濟ノ救濟ニ役立チ、從ツテ地方財政ノ改善ニ貢献シ得ルノテアルカ、以上ノ様ナワケテハ却ツテ地方財政ヲ窮乏セシムルノミテアル。

カト言ツテ補助金ニハ自ラノ使命カ存スルノテアルカラ、之レヲ遽ニ廢止スルノモヨロシクナイカ、補助金ト同様ノ結果ヲ得ルタメニ、減税

等ノ手段ニ依ッテ地方財政ノ困窮ヲ救濟スルノモ右ノ弊害ヲ除ク一方法テアルト思フ。

例ヘハ地方稅ノ負擔ヲ輕減スル爲メニ屢々制限外稅額ノ減稅カ主張サレテキルカ、昭和十年度ニ於ケル道府縣ノ制限外稅額ハ四千二百万円ニ上ッテキル。若シ同年度ノ道府縣ヘノ下渡金、補助金及交付金ノ合計七千二百万円ヲ以テ之レニ當テルナラハ、裕ニ過重負擔ヲカバースル事カ出來ルノミナラス、地方有力者ノ個人的利益ノ手段ニ供スルトイフカ如キ弊害ヲ除キ、一般地方人ノ負擔ヲ輕減スル事カ出來ルトイフ一石二鳥ノ效果カアル。コレハ極ク大雜把ナ議論テアルカ、現行ノ盡ノ補助金制度ハ何ントカ之レヲ改正シテ、ヨリ地方經濟ノ發展ニ役立ッ樣ニシナケレハナラヌ。

第七章　國有林ト官業

國有林、國有地、官業及政府ノ保護ニ係ル特殊產業ニ對シテハ一般ニ地方稅ヲ賦課シ得ナイ。從ツテ國有林等カ現在ヨリモ少ナイナラハソレタケ地租附加稅、特別地稅等ノ收入カ增加シ地方財政ヲ相當ニ潤ス事カ出來ル。

然ルニ我國ノ總面積ノ五割七分ハ山林カ占メテ居リ、ソノ中御料、國有、公有、社寺有等ノ免稅地カ五七%ヲ占メテヰル（昭和八年末現在、農林省「國有林野一班」）從ツテソレタケ地方稅收入カ少ナクナルカラ地方財政ニトッテハ實ノ山ヲ前ニシナカラ乞レニ手ヲ着ケルコトカ出來ナイ狀態ニアル。

然シテ國有林ノ最モ多イノカ東北地方タトイフコトハ、最モ租稅負擔カ過重ナノモ亦東北地方タトイフコト、老ヘ合セテ、國有林ト地方財政トノ關聯ニ對シ何物カヲ暗示シテヰル。例ヘハ全國林野總面積ノ中私有ハ四三%テアルニモ拘ラス東北地方ノ私有ノ割合ハ青森縣二〇%、岩手縣ハ少々多ク四四%タカ、宮城縣ハ三五%、秋田縣ハ二三%、山形縣ニ

五%、福島縣三九%テアル。嘗ツテ二、三年前東北地方救濟ノ聲カ喧シカツタ頃、ソノ救乏ノ原因ヲ探求シテ得タ結論ノ一ツハ東北地方ニ國有林カ多イカラトイフノテアツタ。「國有林ノ巨大ナル存在ハ、經濟的東北窮乏ノ大原因トイフヘキテアル。次ニ國有林ハ地方ノ開發ニ大ナル妨害トナル」ト（東北窮乏ノ眞因ト振興ノ目標」田子一民社會政策時報第百七十四號四四三頁）。事實農家ノ軒下カラ國有林テアリ、雨タレハ國有林ニ落チルトイフノテハ地方財政ハオロカ、地方經濟ソノモノカ疲弊スルノハ當然ナ事タ。貨幣收入ノ少イ農民カ國有林テアルカ爲メニ薪一本モ伐レス、一、二本ノ下枝テモ乏レヲ伐採スレハ官林盜伐トイフ罪名テ檢擧セラレル。

カクノ如ク國有林野ノ存在ハ地方稅源ノ一大部分ヲ奪フコトニ依ツテ地方財政ヲ壓迫シテヰルノテアル。尤モ昭和七年以後ハ國有林所在市町村ニ對シ市町村稅地租附加稅制限率ニ依ル賦課額ト同額ノ國庫交付金ヲ交付スルコト、ナツタノテ、從來程國有林ノ存在カ地方財政ヲ壓迫スルコトカ無クナツタ。農林省調査ニ依レハ國有林野所在市町村數三千百二

ノ中昭和八年度ニ於テ交付金ノ交付ヲ受ケタノハ二千三百四市町村ニシテソノ金額ハ三十八万一千円ニ上ツテヰル。

然ルニ市町村ノ地租附加税ハ概ネ制限外課税ヲナシテヰル。従ツテ制限率ニ依ル賦課額ト同額ノ國庫交付金ノ交付ヲ受ケテモ、現実ノ租税收入豫算額ニハ遙カニ達シナイワケテアルカラ、國庫交付金制度ノ創設ニ依ツテモ末タ國有林ノ存在ト地方財政トノ関係ハ全ク調整サレタ事ニハナラナイ。然シ石ノ交付金制度カコノ関係調整ニ向ツテ率頭一歩ヲ進メタ事ハ言フ迄モナイ。イマ國有林所在地方團体ニ對スル國庫交付金ト現実ニ行ハレテヰル課率トノ差ヲ見テミヤウ。